

15世紀後半北西スイスの蘭と裁判史料  
(その1) ーイムリ紛争：  
第1回公判、第2回公判、第3回公判ー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 俊之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/27132">http://hdl.handle.net/2297/27132</a>

# 15世紀後半北西スイスのラント裁判史料（その1）

## ——イムリ紛争：第1回公判、第2回公判、第3回公判——

田 中 俊 之

### I. 紛争史研究と古文書

1460年、北西スイスの村落シーサハ(Sissach)において俗にイムリ紛争と呼ばれる村落内紛争が勃発した<sup>1</sup>。これは、シーサハの一粉屋の所持するイムリ（おもに北西スイスでそう呼ばれた穀物の計量枙）に偽造の疑いがかけられ、それを押収した村落フォークト（役人）を粉屋が告訴したために、ラント裁判において争われることになった紛争である。この紛争の考察は、たんに村落社会の解明という点にとどまらず、中世末期の政治・経済・社会変動を背景に都市、領主、農民と地域秩序の形成との相互関係の解明に接近できるという意義をもつ。そこで本稿では、この紛争の経緯を記したラント裁判史料を収めるバーゼル農村邦国立公文書館(Staatsarchiv des Kantons Basel-Landschaft)所蔵の古文書 Altes Archiv（略号 AA）の AA1010 Akten, Lade L.11, Bd.214, Nr.7 の一部分について活字化を試みることによって、分析作業の準備を整えることにしたい。

近年、西ヨーロッパ中・近世史において紛争史研究への関心は内外を問わずますます高まりを見せているが、とりわけ村落に関して紛争・紛争解決の実態把握は、史料的なハードルが総じて高いために困難を極める<sup>2</sup>。打開策の1つが未刊行史料へのアプローチであるが、とりわけ非ヨーロッパ言語圏の研究者は、文字の判読をはじめ終始膨大な困難に見舞われる。しかし研究の進展にとって未刊行史料の発掘、血肉化は不可欠であり、今後もそれは変わらないであろう。本稿で試みる未刊行史料の活字化は、そうした必要に応じつつ、紛争史研究に取り組む筆者自身にとっての基礎作業でもある<sup>3</sup>。

### II. バーゼル農村邦国立公文書館所蔵史料

近年、当公文書館において、膨大な所蔵史料のデータベース化が精力的に進められており、その成果はホームページ上で逐次公開されている<sup>4</sup>。データベース化されたものはまだ全体の一部分にすぎないが、データベース化の内容が毎年更新、増加していることから、公文書館におけるこの取り組みはめざましい成果を上げているといつてよいだろう。もっとも、データベース化の中身は個々の内容の詳細にまで立ち入ったものではないことが多いため、必ずしも研究者の欲求を直接的に満足させてくれるものではないかもしれない。それでも以前に比べれば、史料状況の把握という点で隔世の感があるといわざるをえず、データベース化されることのメリットは計り知れない。日本においても近年、未刊行史料を分析した研究が増えつつあり、史料に基づいて議論を組み立てるといふ研究のあるべき姿からしても、未刊行史料の所蔵状況の可視化はとりわけ遠隔地の研究者にとってはきわめて貴重であり、こうした取り組みの今後ますますの進捗が

期待される。

ここで、当公文書館の所蔵史料を眺望しながら、本稿で扱う史料にアクセスしてみよう。当公文書館の所蔵史料は内容その他に応じていくつかのグループに分類・整理されているが、そのうち **Altes Archiv (AA)** は 13 世紀頃から 1833 年までの旧バーゼル農村邦の史料を収めており、1832 年頃以降の史料を収めた **Neueres Archiv (NA)** とは区別されている。それは、バーゼルでは 1832/33 年にそれまでの「カントン」すなわち「邦」がバーゼル都市邦 (**Basel-Stadt**) とバーゼル農村邦 (**Basel-Landschaft**) とに分割されたことによって、それ以前の史料は **Altes Archiv** に、それ以降の史料は **Neueres Archiv** に振り分けられたことによる。ちなみに **Neueres Archiv** に収められた史料は 1950 年までであり、それ以降のものは **Verwaltungsregistraturen (VR)** に現在進行形で収められている<sup>5</sup>。

**Altes Archiv** は **AA1001** から **AA1020** まで 20 の史料群からなっている。例えば、**AA1001** には **1A. Urkunden (1239-1789)**、すなわち「証書 (1239~1789 年)」、**AA1002** には **1B. Jahrzeitbücher (vor 1529)**、すなわち「死者追悼ミサ記録 (1529 年以前)」、**AA1003** には **1C. Urbare und Bereine (15.-19.Jahrhundert)**、すなわち「**Urbare** ないし **Bereine (15~19 世紀)**」<sup>6</sup> といったタイトルがつけられており、史料の性格・種類ごとの分類が見て取れる。これらは、各アムトないしラントフォークタイ (代官区、管轄区) に関するバーゼル市の管理局、リースタール、ファルンスブルク、ヴァルデンブルク、ホムブルクなど各ラントフォークタイ城館それぞれの文書保管庫、ラントフォークタイ・ビルスェック (**Birseck**) ないしラントフォークタイ・プフェッフィング (**Pfelingen**) に関する領主司教 (**Fürstbischof**) 管理局にもともと保管されていたものである。ちなみに 2011 年 2 月現在でデータベース化されているのは、**AA1001**、**1002**、**1003**、**1010**、**1011**、**1012**、**1013**、**1014**、**1020** である。

本稿が扱う **AA1010** には **2A. 1 Akten Laden L. 1-192 (vor 1832)** というタイトルがつけられている。**Akte** は「文書」を意味するが、**Lade** は上記の **Urbar**、**Berein** 同様に史料名である。また略号 **L.** は **Landsache**、すなわち「農村域の案件」を意味し、略号 **St.** の **Stadtsache**、すなわち「都市の案件」に対置される。タイトルは、いわば **Lade** 文書集たる **AA1010** に **Landsache** が 1 から 192 まで分類されていることを示している。そしてこれらのうち、**Lade L. 9** から **L.38** まではフォークタイ (ないしアムト)・ファルンスブルクにおける案件を収めており、本稿が対象とする **L. 11** はそのうちの 1 つで、村落シーサハに関するものである。さらに **L. 11** は **Bd.214** (第 214 巻) から **Bd.220** (第 220 巻) までの 7 巻より構成されており、本稿が対象とするのは **Bd.214 Allgemeines Nr.1-199** (第 214 巻：一般：1 番から 199 番) のうちの **Nr.7** (第 7 番) である。

以上を経てようやく対象史料に辿りついたが、この **Nr.7** のなかではイムリ紛争をめぐるラント裁判の記録が大きなウェイトを占めている。**Nr.7** の最初のページには表題として、「いかにしてシスガウにおけるラントグラーフシャフトがわが都市バーゼルに委譲されたか」<sup>7</sup> という文言が掲げられている。1461 年 8 月、バーゼルは、リースタール、ファルンスブルク、ヴァルデンブルク、ホムブルクの 4 フォークタイ (アムト) などを包含する隣接の広域支配領域シスガウ・ラントグラーフシャフトを、ラントグラーフであったフライヘル家系ファルケンシュタイン家から

獲得した<sup>8</sup>。このことは、都市の領域支配形成の観点からも、北西スイスにおける政治体制の転換を意味していたといえる。Nr.7はそのプロセスに関連する案件を収めたものと見るができるが、本稿が取り上げるイムリ紛争の裁判もまた、全体として見れば、そうしたプロセスに位置づけられる案件の1つであっただろう。本稿でこの史料の活字化を試みるのは、中世末期の北西スイスにおける政治体制の転換と、都市、封建領主支配、地域秩序形成との相互関係について、ラント裁判がどのような像を浮かび上がらせてくれるのかを分析、考察する土台を整えるためにほかならない。

史料解読にあたって、あらかじめ断っておかなければならないことは、Nr.7全体にページ番号が一切振られていないという点である。したがって便宜上、本稿執筆者が自身のルールに従ってページ番号を振っていった。Nr.7の主題を記した最初のページを1ページとするなら、このラント裁判の表題「1460年のハンス・ミュラーとハンス・ラングの紛争に関するシーサハのラント集会」<sup>9</sup>が記された23ページを経て、25ページより裁判の具体的な経過が記される。本稿で活字化を試みたのは、後述する例外的な部分を除けば、この25ページ以下の部分である。なお、この裁判史料の分量は全体で70ページを超えるため、紙幅の都合上、本号と次号とに分割して掲載せざるをえなかったこともあわせてお断りしておきたい。

### Ⅲ. 第1回公判、第2回公判、第3回公判

イムリ紛争の原告は村落シーサハの粉屋ハンス・ミュラー、被告はシーサハの村落領主ゲッツ・ハインリヒ・フォン・エプティンゲンの隷属民(*eigen*)<sup>10</sup>で、領主が任命した役人たる村落フォークトのハンス・ラングである。裁判はシスガウ・ラントグラーフシャフト内の村落ゲルターキンデンのフォークトであったハンス・シュミットを裁判長として、第1回公判(1460年)、第2回公判(1460年7月28日)、第3回公判(1460年8月25日)、第1回判決(1460年)、第4回公判(1463年6月11日)、第2回判決(1463年)の順に進められた<sup>11</sup>。史料の該当ページは、第1回公判が25-29ページ、第2回公判が29-39ページ、第3回公判が40-65ページ(以上、本号)、第1回判決が67-90ページ、第4回公判が20-22ページ、第2回判決が91-95ページ(以上、次号)である。第4回公判のみが23ページの表題よりも前におかれていて不自然であるが、第1回判決と第2回判決の間に少なくとも1回は公判が行われたと考えざるをえず、また内容から20-22ページの部分がそれに当たると判断した。

紛争の具体的な分析と考察は別稿に譲ることとし、ここでは以下、第1回、第2回、第3回の公判それぞれについて主要な論点と構成、史料上の特徴を把握しておくことにしたい。必要に応じてページと行を(ページ:行)の形で示した。

#### 第1回公判

日付と案件のタイトル(25:1-2)に続いて本文が始まる。*Ich*と一人称で開催の辞を語り出すのは裁判官ハンス・シュミットである。「ファルンスブルクのフライヘルにしてシスガウのラントグラーフたる高貴で由緒ある領主でユンカーのトマス・フォン・ファルケンシュタインの代理か

つ委託で」(25:4-6) この裁判が開始される旨を宣言した後、「一方に、強大なる領主たる騎士ゲッツ・ハインリヒ・フォン・エプティンゲンの従者であるシーサハのハンス・ラング、もう一方に、今はブックテンに住んでいるこれもシーサハのハンス・ミュラー」(25:11-14)と、被告および原告の紹介をした後、公判までの経緯、ミュラーによる告訴の理由を述べていく。それによると、ラングはミュラーに対して「不公正で不快な陰謀をめぐらせ、彼の独自の圧力によって罪を免れ、罰を科せられずにいる」(25:19-20)のであり、ラングには「彼に対して犯した悪事に責任がある」(25:24-25)、また裁判において説明がなされなければ、「評判、名誉、権利が断たれてしまう」(25:29)というのである。

引き続いて裁判官が述べるのは、出廷しなかった被告に対する非難である。「しかるに彼は不服従にてこの場にはいない。はたしてこれが正義であり公正といえようか。ハンス・ラングはハンス・ミュラーの訴えと要求に対し責任を負うべく3度目の召喚を受けたのに。」(26:11-15) それに対し、おそらく被告代理人による弁明を受けてのことであろう、「ハンス・ラングが今回とりわけ出廷できなかったのは、主人であるゲッツ・ハインリヒ・フォン・エプティンゲン殿のためであり、彼が(ラングを)別の用事で遣わしたためである」(27:10-13)という被告側の理由にも触れるが、被告への非難は次の宣告に至って止めを刺す。「すなわち彼(ラング)は枿あるいはイムリの件で圧力によって不当にも罪を免れるよう仕組んだ。そればかりか彼(ミュラー)の身体、財産、名誉を掻き回し、傷つけた。彼(ミュラー)は著しい損害と苦悩をも招き、被ったのだ。彼(ラング)は正義をあらゆる犠牲と損害をもってして償い、彼(ミュラー)に対しそれを必要に応じて戻してやるべし。」(28:19-24)

第1回公判の末尾には次回公判(ラント集会)の開催日が告示され、裁判官の印璽とともに日付が再度記される(29:10-18)。

## 第2回公判

第2回公判は構成として前半(-35:12)と後半(35:13-)とに分かれている。前半の29ページ19行目の日付と後半の39ページ29行目の日付が同じであることから、同じ日に審理が行われたと推定できる。

前半の特徴は、出廷した領主、被告、原告それぞれへの聴取、それぞれの陳述への反論、再反論のやりとりである。とりわけ領主は「自ら出廷した」(29:22-23)が、それは「人々はゲッツ・ハインリヒにも聴取すべきだし証言させるべきだと思っており、ゲッツ・ハインリヒ殿もまた同じ認識であった」(31:27-32:1)ためであった。注目すべきは、領主とその従者たる被告のやりとりを聴いていた人々には「彼(領主)に関しては力がなく時代遅れだと認識されただろう」(34:15-16)ことである。前半末尾には、被告が保証人を申請し、被告の保証人として3名、原告の保証人として3名が裁判官の印璽のもと承認されたことが記されている(35:1-12)。

後半で注目すべきは、被告と原告の間の激しい応酬である。「原告ハンス・ミュラーはそこに控え、代理人を通じて以下のことを言明した。すなわちハンス・ラングは彼(ミュラー)が自ら負担したイムリを権利もなくまた力づくで押収し、責任と罪を免れているが、それについて彼(ラ

ング)には資格も権限もなかったのだ。(中略)彼(ラング)の気まぐれによって、あたかもそれが偽造され正確でないかのように扱われたが、そのことは彼(ミュラー)のよい評判、名誉、身体、財産を掻き回し、傷つけたのだ。そのことでまた彼は著しく大きな犠牲と損害を招いたのである。」(35:15-36:1) これに対し被告は代理人を通じて以下のように反論する。「彼(ミュラー)は枘を1つ所持していて、それは1フィアテルにつき6イムリ<sup>12</sup>で通っているが、ツンツゲンでは1フィアテルにつき7イムリになる。彼(ラング)はこの件を四人衆とゲマインデに相談し、話し合われたのだ。よってそれは四人衆とゲマインデ全体がしたことであり、彼は彼らと一緒にしたにすぎない。」(36:13-20) これを受け、原告は以下のように再反論する。「彼(ミュラー)はイムリが古くもはや役に立たなくなったので全く新しいイムリが必要となり、要求して作らせたのである。それゆえラインフェルデン<sup>13</sup>に問い合わせれば、れっきとした正しいものであることがわかるだろう。」(37:18-23)

後半の末尾には、証人尋問の予告がなされ、被告側の証人、原告側の証人それぞれの名前が列挙される(38:14-39:9)。このなかで最も注目すべきは、原告側証人として「裁判官たる私」(39:5)が挙がっていることである。最後には次回ラント集会開催日の告示がなされる。

### 第3回公判

第3回公判のおもな内容は証人尋問であるが、延々20数ページに及ぶ公判の記録はイムリ紛争のなかで最も豊かな内容を含み、都市、領主、農民と地域秩序の形成との相互関係の考察にとっても多くの示唆に富んでいる。紙幅の関係上、内容の詳細な紹介は別稿に委ねざるをえない。ここでは最小限必要な情報に限り挙げておくことにしよう。

最初に注目すべきは、開催の辞、被告側の答弁、原告側の反論、被告側の再反論に続いての領主ゲッツ・ハインリヒ自らの陳述である。「この件はここにはふさわしくなく、またここに属するものでもない。これは彼(ゲッツ・ハインリヒ)の権利に対する陰謀である。なぜなら同様の案件は彼に属しており、受けるのがふさわしいのは彼の裁判権であって、上級裁判権ではないからだ。また彼は公正に自身の裁判権を持っているのであり、そこで審議すべきであって(裁くのは)他の誰でもない。」(41:9-14) 村落内紛争である本件が領主裁判ではなくラント裁判で審議されることへの不満を、領主はここに至って吐露しているのである。

さて44ページの後半から57ページまで、被告ラング側の証人尋問が記録されている。証言者は、四人衆もしくは誓約衆と呼ばれた4名、耕地番1名、その他17名の計22名である。証言を眺望すると、それらは内容に多少のヴァリエーションを伴いながらも記録に際して定式化されていることがわかる。例えば最初の証人リュッチ・ヒュグリンの証言は、「ハンス・ラングがいうには、親愛なる友よ、ハンス・ミュラーが新しい枘を作ったらしいが知っているか。それは1フィアテルにつき6イムリ以上にはならない大きさなのだ。しかしツンツゲンやその他の場所では1フィアテルにつき7イムリで通っている。そのことを私にハインツ・ライマーとオルティンゲンのクライン・ハンス・シュナイダーが話してくれた。クラウス・ノリンガーもまた私に、ハンス・ミュラーの枘が大きすぎることについてシュタインブルッヒェルからも聞いたと話してくれ

た。(中略)それについてこの証人リュッチ・ヒュグリンは答えた。私はそれについてあまり知らない。なぜなら彼が新しい柀を作ったとか、それが大きすぎるというのは、村の女たちのおしゃべりだからだ。しかしその真偽のほどを私は知らない。(中略)ハンス・ラングがいうには、この件はわが主人にもたらされるのがふさわしく、わが主人に帰属すべき事柄だ。それゆえ私は、誓約によってあなたがたに、このことを秘密にしておいてもらうようお願いしたい。そして私が主人に持ちかけるまで各々のなかにとどめておいてもらいたい。その後しばらくしてゲッツ・ハインリヒ殿がシーサハへやって来たのだ。」(44:17-45:16)というものであるが、この証言のヴァリエーションが他の証言者の証言の随所に見られる。さらにそのヴァリエーションのなかにはしばしば、ヴェルンヘル・トゥルフセス、ウルリヒ・フォン・シーサハ、ヴィルヘルム・フォン・ルンスといった貴頭の名前が登場するが、ここでは指摘だけにとどめておく。

58 ページから 65 ページまでは原告ミュラー側の証人尋問記録である。証言者は、裁判官ハンス・シュミットを筆頭に、マクデンのフォークト、四人衆 3 名、その他 4 名の計 9 名である。証言を眺めると、裁判官の長い証言に続いての 2 名の証言は裁判官に同じと記されているが(60:1-12)、他の証言者の証言には、原告側証人のときほど顕著な定式化は見られない。しかし何よりも裁判官の証言の内容が全体に強いインパクトを与えているように見受けられる。それは以下のようなものであった。「ハンス・ミュラーはクレヴィン・エルニの部屋へユンカーたるヴィルヘルム・フォン・ルンスと彼(裁判官)を訪ね、相談を持ちかけた。自分は柀を 1 つ持っているが、それから何ら利益を得たことはないのであり、ここではもはや顧客が得られないのならそれを壊してしまいたい。(中略)そこでユンカーたるヴィルヘルムは述べた。ハンス・ミュラーよ、お前が私のもとへやって来て私に問いかけたのは正しい。(中略)私もそこ(ラインフェルデン)へ行き、誓約衆を通じてお前に別の柀が必要に応じて与えられるよう手配しよう、と。ハンス・ミュラーは、(中略)同日ラインフェルデンへ柀を持ってやって来た。ユンカーたるヴィルヘルムとこの証人(裁判官)は誓約衆に、彼に柀を 1 つ作ってやるよう求め、それが公正で正確なものであることを求めた。その後、マルクヴァルト・フォン・バルトエック殿がやって来た。(中略)彼(ミュラー)はそれが正確なのか否か吟味されることを望んだ。(中略)誓約衆がその柀を吟味し、それが正確であると結論づけ、マルクヴァルト殿のところへ行き、その柀が正確であったと誓約して報告した。マルクヴァルト殿はハンス・ミュラーに、柀を受け取り家に帰ってよいと述べた。(中略)マルクヴァルト殿は、お前はおそらく正しいことをしたと述べた。そしてこの証人(裁判官)その他の前で、彼ら(裁判官たち)がフォークトたるハンス・ラングと四人衆に対し、ハンス・ミュラーが 100 リブラの慰謝料を当然受け取ることができるようにすることを委ねた。」(58:4-59:21)

この後、判決に向けて裁判の方向性が決定づけられたとすれば、おそらくこの裁判官自身の証言が最も強い影響力を持ったであろう。なお、原告側証人の証言には随所にヴィルヘルム・フォン・ルンスの名が、また裁判官の証言にマルクヴァルト・フォン・バルトエック、また別の証言者の証言にはバーゼルのツンフトマイスターたるプレーメンシュタインの名が登場していることもあわせて指摘しておこう。

第3回公判の末尾には第1回、第2回に見られたような結びの言葉はない。若干のメモ書きらしきものが見られるだけであるが、これが何を意味するのかは不明である。内容豊かな公判記録が唐突に終了することに強い違和感を覚えるが、これ以上、立ち入る術はない。

註 (紙幅の都合上、最小限にとどめた。)

1 「イムリ紛争」は Immlistreit の邦訳である。リップマンがこの紛争に言及している。Rippmann, Dorothee, *Gemeinde im Widerspruch: Soziale Unrast und Bauernunruhen*. in: *Nah dran, weit weg*, Bd.2, Liestal 2001, S.212-222.

2 日本における最近の成果として、服部良久『アルプスの農民紛争—中・近世の地域公共性と国家—』(京都大学学術出版会、2009) が重要である。

3 筆者は未刊行史料の活字化を前稿においても試みた。田中俊之「15世紀体僕制紛争をめぐる都市・領主間の往復書簡—バーゼル農村邦国立公文書館所蔵史料より—」『金沢大学歴史言語文化学系論集 [史学・考古学篇]』2(2010)、143-178 ページ。

4 詳しくは、<http://www.baselland.ch/Archivbestaende.309604.0.html> を参照。

5 その他の分類のカテゴリーとして、Gerichtsarchiv (GA)、Bezirksschreibereien (BS)、Statthalterämter (ST)、Übrige Nebenarchiv (UE)、Karten und Pläne (KP)、Sammlungen (SL)、Privatarchiv (PA) がある。

6 Urbar(e)、Berein(e) ともに封建支配の課税対象となる土地所有の記録である。

7 史料における原語表記は *Wie die Landtgraffschafft Im Siszgouw an mir Stadt Basell ....* であり、.... の部分は読み取れなかったが、「移行」「委譲」に類する動詞が入ることはまちがいない。

8 このことを示す史料として、Boos, Heinrich(Hg.), *Urkundenbuch der Landschaft Basel*, Bd.2(2.Hälfte), Basel 1883, Nr.826 (S.989-993)。

9 史料における原語表記は *Lantage zû Sissach an treffen hanns müller Vnd hanns langen Anno dm lx ic* である。オトナン＝ジラル女史によれば、dm = domini の略号、ic = et cetera の略号。

10 史料 33 ページ 4 行目に *her[r] gotz heinrich hanns langen her[r] vnd sin eigen* という記述がある。

11 第2回、第3回、第4回の公判の日付は上記註1のリップマンの記述による。

12 フィアテル、イムリともに容量を示す単位として使われている。

13 ラインフェルデンはツェーリングン家断絶(1218年)後、帝国直轄となるが、1330年にハプスブルク家の抵当所有となり、1449年にはシュルトハイス選出権、上級裁判権を伴うゲマインデの自治権を留保しながら、ハプスブルク家支配下に編入された。15世紀北西スイスにおける首邑都市の1つであったと考えられる。*Historisches Lexikon der Schweiz*, 13 Bde., Basel 2002- の Rheinfelden(Gemeinde)の項を参照。

## 【凡 例】

- 1) 大文字、小文字、「/」印は史料の記載どおりに記した。史料にはカンマ、ピリオドはなく、文の切れ目、文節の切れ目と、大文字、小文字、「/」印との関連性はない。
- 2) 史料中の単語にしばしば‘ひげ’印が付されているが、これは省略記号であり、適宜 [ ]で補った。
- 3) u と v、a と o、i と j、I と Jなどの区別は史料においても厳密ではない。
- 4) s と z もそのまま記した。lassen を laszen などと記している。
- 5) 史料上の取消線はどの形のものも — に統一した。通貨単位リブラについては、取消線と区別するため -lib- と記した。
- 6) 挿入箇所は ^ 印 2 つで挟み込んで示した。
- 7) 不明の箇所はいずれも .... と記した。

uff mēdach nach sant Johanne Baptisten tag Anno 1572  
In hangender sache Hans Mullers (und Hans Langen)

Hans Schmit wagt zu Eitelkungen Ein lunt inrichtigen und  
betend offentlich mit dirc gestreiff durch am stat und In namen  
des edlen volgebornen herren Jurell Chamas von Wallen stein  
srij her zu vornsperg und Langgraffen Im Spßgaw auf mine gnedig  
herren In dem dorff Süssach Im Basler Bistum zu legen an  
vornlichen Stat des lantgemeintheit zu der egenemlichen Langgraff  
schafft zu Süssach Im Spßgaw mit dirc her nach gemelten  
vntersprecht zu gemelte gesessen In und da vor zu recht zu  
fir mich verliert tag an geset und gebeten hangen lang  
von Süssach diener des strengen westen her Sag hemmelich  
von Eperngy rittid an ein und Hans Muller auch von  
Süssach recht monschafft zu Euelen anders teils und der selb  
Hans Muller kam fir mich in offenkammer gericht und offnete  
durch siner fir sprechen herren schriblin von zerrung an  
das er etwas anuordnung und zu spruchen an den obgedachten  
Hans Langen als von eins anich oder vmbins wegen her  
darin In etlich vnbillich vdrusslich Intrag geton und  
durch siner eignets gewalte und dienlichen und vntersprecht In  
oder inrichtig halt geton und mit In fir genommen bette  
darumb er also da stunde und In fir und in recht forderte  
als uff einen angefarrey verliert und gebeten lang  
sich siner anuordnung und stinliche spuelen an In begangen  
gegen In ze vambourten und vorded also der ickgenant  
Hans Lang dar stunde und uff In elage merken und anuante  
warte aneinte er In elage und zu spruch gegen In luter  
und clerlichen In gerichte bestymen und darlegen daran  
man siner schimpff er und recht verston wurde das er  
des In recht getrunte ze gemessend und hat mich also  
ein frage darumb an recht ze tünd wie er In sinliche  
fir nenen solte als recht vore vart nach min frage

uff mendag<sup>1</sup> nach sant Johans bapptisten tag<sup>2</sup> Anno lx<sup>o</sup> 3  
 In hangender<sup>4</sup> sach hanns mullers vnd hanns langen

Ich hans Schmit vogt zû Gelterkingen<sup>5</sup> Tûn kunt menglichem<sup>6</sup> vnd  
 beken offentlich[e]n mit dirre geschrift dz ich an statt vnd In namen  
 5 des Edlen wolgebornen herren Junckh[err] Thomas von valken stein  
 frÿ her[r] zû varnsperg vnd lantgraffen Im Syszgow<sup>7</sup> a...<sup>8</sup> mins gnedig[e]n  
 herren In dem dorff Sÿssach<sup>9</sup> In Basler Bistum gelegen an ge  
 wonlicher Statt des lantgerichtes zû der Egenembten lantgraff  
 schafft zû Sÿssach Im Syssgöw mit disen hie nach genembten  
 10 urteilsprechn[ern] zû gerichte gesessen bin vnd da vor zûrechter zit  
 für mîch verkunt tag an gesetzt vnd gebotten hansen langen  
 von Syssach diener des Strengen vesten her[r] Götz heinrichs  
 von Eptingen Ritters an eîm vnd hansen muller ouch von  
 Syssach ietz<sup>10</sup> wonhafft zû Butken<sup>11</sup> anders teils vnd der selv  
 15 hans muller kam für mich in offenv[er]bannen gerichte vnd offnete  
 durch sinen fûrsprechen henslin schöiblin von zegringen<sup>12</sup> wie  
 das er etwas anuordnung<sup>13</sup> vnd zû spruchen an den obgedachten  
 hannsen langen als von eîns mesz oder ymlins wegen hette  
 darin er Im Etlich vnbillich v[er]driesslich Intrag<sup>14</sup> geton vnd  
 20 durch sinen eignen gewalte vnv[er]dienlichen vnd vnv[er]schult sin  
 oder menglichs halb geton vnd mit Im fûr genomen<sup>15</sup> hette =  
 darumb er also da stünde vnd In fûr vnd in recht fordrete  
 als uff eînen angesetzten verkunten vnd gebottnen lantag  
 sich siner anuordunge vnd semlichs frevels an Im begangen  
 25 gegen Im ze v[er]antwurten vnd wen[n] den[n] also der ietz genant  
 hans lang dar stünde vnd uff sin clage merken vnd antwurte[n]  
 wolte meinte er sin clage vnd zû spruch gegen Im luter  
 vnd clerlichen<sup>16</sup> In Gerichte bestymen vnd darlegen daran  
 man sinen glimpff ere vnd rechte verston<sup>17</sup> wurde das er  
 30 des In recht getruwte<sup>18</sup> ze geniessend vnd batt mich also  
 ein frage darumb in recht ze tûnd wie er ~~hæ~~ semlichs  
 für nemen solte als recht were wart nach min[er] frage

Emholdlich erlent das man omich als einen amptman fragen solt  
ob im semliche Stunt cond ze wiffen geton were uff semliche us  
dem gericht mitwilt so ich hette im das solt mit munde  
im zu gutten zu verkunt gelotten cond mit im goret uff das  
er mir auch geantwurt hette es were im lies cond er wolt  
den tag werston doch wolt er da zwistigen semliche sinen heren  
her gotz hemmich fur lingen cond sinen warte darr habey  
cond als nu semliche min sage im gericht vergewer lies aber  
hans muell zu recht Sid mals cond man wol horte cond stund  
das hampfen lingen semliche nach des richters sage zu gutten  
zit ze wiffen geton gelotten cond wolt were cond aber er  
wongehorsam cond mit da were was den darrumb recht  
cond billichey were / wart nach min frage erlent das  
man hampfen lingen uff dz dritmal ruffen solt sich gogen  
clag cond insprach hans muellers ze wantworten cond  
als nu semliche ruff uff das drit mal bestatig cond die  
meind darstund wonsfney wegen lies aber hans muell  
zu recht was nu recht were wart erlent sid mals cond  
hampfen lingen cond menglichen so da ze schaffen hette  
verkunt cond gelotten were hette den niemand usit anders  
da ze schaffen cond fur zemenend mochte er tun cond an  
hoben lene den hans lang da zwistigen ob das gericht  
uff stunde cond wer antwurt sich gogen im solte man wol  
lene er aber nit solte man hampfen mueller lassen wer  
lingen darr zu er recht hette / cond als nu semliche urteil  
vergewer cond von allen darr wegen so da ze schaffen  
hattend gerett cond an andern künftigen lantag uff gestoben  
cond an gestetzt wart cond niemand nutzic mer da fur nemen

Einhelklich[e]n<sup>19</sup> erkent das man mich als einen amptman fragen solte  
 ob Im semlichs<sup>20</sup> v[er]kunt vnd ze wissen geton were uff semlichs ich  
 dem gerichte antwûrt Jo<sup>21</sup> ich hette Im das selb mit munde vor  
 hin zû gûtter zite verkûnt gebotten vnd mit Im gerett uff das  
 5 er mir ouch geantwurt hette es were Im lieb vnd er wolte  
 den tag verston doch wolte er da zwischen semlichs sinem herren  
 her gottz heinrich[e]n fur lengen vnd sinen ratte darin haben  
 vnd als nû<sup>22</sup> semlich min sage In gerichte vergieng lies aber  
 hans mûll[er] zû recht Sid mals<sup>23</sup> vnd man wol horte vnd v[er]stünd  
 10 das hannsen langen semlichs nach des richters sage zû gûter  
 Zit ze wissen geton gebotten vnd v[er]kunt were vnd aber er  
 vngheorsam vnd nit da were was den[n] darumb recht  
 vnd billichen were // wart nach min[er] frage erkent das  
 man hansen langen uff dz dritmal rûffen solte sich gegen  
 15 Clag vnd ansprach hans mullers ze v[er]antwurten vnd  
 als nû semlicher rûff uff das drit mal beschach vnd ~~die~~  
 niemand darstünd von sinen wegen lies aber hans mull[er]  
 Zû recht was nû recht were wart erkent sidmols vnd  
 hannsen langen vnd menglichem so da zeschaffen hette  
 20 verkunt vnd gebotten were Hette den[n] iemand utzit<sup>24</sup> anders  
 da ze schaffen vnd für ze nemend möchte er tûn vnd an  
 heben keme den[n] hans lang da zwischen eb<sup>25</sup> das gerichte  
 uff stünde vnd ver antwurte sich gegen Im seche man wol  
 keme er aber nû<sup>26</sup> solte man hannsen muller lassen ver  
 25 langen darzû er recht hette vnd als nû semlich urteil  
 vergieng vnd von aller deren wegen so da ze schaffen  
 hattend gerett vnd an ander kunfftig lantag uff geschoben  
 vnd an gesetzt wart vnd niemand nutzît<sup>27</sup> mer da für nemen



Wolt frogt ich der ríchter ob sust<sup>28</sup> iemand<sup>29</sup> des andren me  
 wartete Stünd aber hans muller dar vnd offnete durch  
 sinen fursprechen wie dz er hanns langen als vor wartete  
 vnd sinem rechten nachkomen wolte vnd begert Im aber  
 5 ein frage ze tünd was nú furbasz<sup>30</sup> recht were // wart nach  
 min[er] frage erkent das man hannsen langen aber uff dz  
 dritt mal rúffen solte sich gegen Clage vnd anuordnungen  
 hans müllers ze v[er]antworten / vnd als nú semlicher rúff  
 aber uff dz drittmal beschach Stünd ein[er] dar mit namen  
 10 Clewin nollinger vnd versprach hanns langen wie das  
 er nú ze mal nit komen möchte von wegen her[rn] Götz heintr[ich]  
 von Eptingen sines herren vnd der hette In an etliche  
 ende ander geschefften halb ze werbende geschikt // Vff das  
 hanns muller antwurte er getruwte nit dz semlich ver  
 15 sprechen Im an sinem rechten keínen Intrag noch schaden  
 bringen solte vnd were das sach han[n]s lang wissete wol  
 das er semlichen lantag als da ze mal verston vnd selbs  
 da sin solte // Hette In da etwas geirret<sup>31</sup> solte er vorhin by  
 gûter zít dem vogte oder dem gerichte ze wissen geton  
 20 haben vnd man möchte da by wol merken vnd v[er]ston  
 das es nût anders den[n] ein verziechen vnd verachtung  
 des rechten vnd ein bruch sines versprechens so er dem  
 vogte geton hette In dem er als man wol verstünde vn  
 gehorsam were vnd aber er als als ein gehorsamer  
 25 dastünde vnd sin bûrgen<sup>32</sup> so für In versprochen hettind  
 lösen vnd lidig<sup>33</sup> machen wólte getrúwte auch da by  
 si soltend mit recht îres versprechens lidig g erkent

werden und lies also aber zu recht ob das mit billigen were. Also uff  
mangerley woorten rede und widerrede so der edel Junckhe Thomas  
van Walsenstein uf zu des vil gedachten Hans Mullers Clag und  
anmütunge der Burger halt solb recht und anwurte mit not hie  
meldend und nach dem und semliche zem rechten gesetz wart  
da vordend des genannten Hans Mullers Burger mit emzeligen  
urteil gegen dem megenantey Herren von Walsenstein uf irs  
versprechens für Hans Muller geton lidig und loß erkant  
nach Inhalt eines urteil brieffe so auch dem gedachten Hn von  
Walsenstein uf darumb erkant wart mit mer woorten klärlig  
darin begriffen / off semliche aber den vilgenant Hans Muller  
zu recht lief so mals und im sin Burger mit recht lidig  
erkant vordend vordend und aber er dem rechten und aben  
dem rechten in alle nach gehörig und sinem versprechen grüß  
geton und aber Hans lang vore vor statt Hann sumig und  
das gericht vor achtet auch komen rechtlichen schin erzoug  
nach dar geleit was im Hann gepunbt oder gevret hette  
ob er im dem mit semlichen schmach freuel von ere schand und  
luster so er im des mess oder imline halt amvorschult mit  
gewalt und mit recht zu gefüget hette das im doch sinen  
lip güte und ere berürte und betastete / er auch des zu grossen  
merklichen schaden und kumber komen were und empfangen  
hette y billichen mit allem lasten und schaden abtragen und  
im den nach naturfft vorder leyre salt / wart aber nach im  
frage emhelllich erkant so mal und Hans lang hann  
sumig und bruchig were und das gericht vor achtet  
und vrschmacht auch komen rechtlichen schin nach firmant

Werden vnd lies also aber zû recht ob das nit billichen were Also uff  
 mangerley<sup>34</sup> Worten rede vnd widerrede so der Edel Juncker Thoman  
 von valkenstein a... zû des vil gedachten hans mullers Clag vnd  
 anmûtunge der burgen halb selb rett vnd antwûrte nit not hie  
 5 meldend vnd nach dem vnd semlichs zem rechten gesetzt wart  
 da wurdend des genanten hanns mullers burgen mit einheliger  
 urteil gegen dem megenanten herren von valkenstein a... ires  
 versprechens fûr hans muller geton lidig vnd losz erkant  
 nach Inhalt êins urteil brieffs so ouch dem gedachten h[e]r[rn] von  
 10 valkenstein a... darumb erkent wart mit mer Worten klârlich[en]  
 darin begriffen // Vff semlichs aber der vilgenant hanns múll[er]  
 Zû recht liesz sid mols vnd Im sin bûrgen mit recht lidig  
 erkent werend worden vnd aber er dem rechten ~~vnd aber~~ er  
 dem rechten in alle weg gehörig vnd sinem versprechen gnûg  
 15 geton vnd aber hans lang wie vor statt harin sumig<sup>35</sup> vnd  
 das gerichte ver achtet ouch keinen rechtlichen schin<sup>36</sup> erzeigt  
 nach dar geleit was In harin gesumbt<sup>37</sup> oder geyrret hette  
 ob er Im den[n] nit semlichen schmach freuel vnere schand vnd  
 laster so er Im des mesz oder jmlins halb vnverschult mit  
 20 gewalt vnd one recht zû gefûget hette das Im doch sinen  
 lip gût vnd ere berûrte vnd betastete / er ouch des zû grossem  
 merklichen schaden vnd kumber komen were vnd empfangen  
 hette i...<sup>38</sup> billichen mit allem kosten vnd schaden ab tragen vnd  
 Im den noch noturfft wider keren solte / wart aber nach min[er]  
 25 frage einhelklich[e]n erkent sid mal vnd hans lang haran  
 Sumig vnd bruchîg were vnd das gerichte verachtet  
 vnd v[er]schmacht ouch keinen rechtlichen schin noch fûrwort

In gericht erzeigt nach <sup>dar</sup> geleit hette da by man coosten mochte  
was im haden geweret hette und aber hans müller wollellich  
dem rechten nach komen und dem gnüg geton / was den  
hans müll semlicher sachen halb kosten und schaden empfangen  
hette das im den hams lang nach aller noturfft und sünden  
die schmach stand und unere wider wiffen gang und gar wider  
Eren and ab wagen sol // es were auch den sacht das hams  
lang für brechte das zu recht gnüg were was im hams  
sünde und geweret hette das solte im den vor behalten im  
and solle auch semlich fürbrüggen bestehen uff  
mendonag nach sant Jacobs tag stürrest künfftig  
auch uff einen lanttag der inen darumb uff den selben  
tag angesetzt und bestheyden want dier unal rede und  
wider rede hat im hams müll und inid lüerung und  
erlanomß brieff gegebend daz im auch wider inid des richters  
Ingesigel mit einhelig unal <sup>gegeben</sup> erkent want von allen dency  
so hi by warend und gefragt wunden <sup>ge</sup> das paimda pp schme  
baptis anno 1562

Item uff mendonag nach sant Jacobs tag anno 1562 kamend hams aber  
nach dem abgestriben abstheid hams müller and auch  
hams lang für and im recht / and sünden der sachen had  
Gög heimrich von eptingen miten selb persönlich in gericht  
darstund und etlich brieff missuay von dem lantfagte geben  
In recht hören und lesen ließ die da im Ertelend uffschlegte  
des selben rechtley and lanttagess so der lantfagte darumb  
den richter and dem rechten gestriben bis zu uftrag des

A  
und arlungung

In gerichte erzöigt noch ^Jar^ geleit hette da by man verston mochte  
 was In haran geirret hette vnd aber hans muller vollenklich  
 dem rechten nach komen vnd dem gnüg geton // was den[n]  
 han[n]s müll[er] semlich er<sup>39</sup> sachen halb kosten vnd schaden empfangen[n]  
 5 hette das Im den[n] hanns lang nach aller noturfft vnd sunder  
 die schmach schand vnd vnere wider rüffen<sup>40</sup> gantz vnd gar wider  
 keren vnd ab tragen sol // Es were ouch den sach das hanns  
 lang fur brechte<sup>41</sup> das zû recht gnüg were was In harin ge  
 sumbt vnd geirret hette das sölte Im den[n] vorbehalten sin  
 10 vnd sölle ouch semlich furbringen beschehen uff =  
 mendag nechst nach sant Jacobs tag schierest kunfftig  
 ouch uff einem lantag der Inen darumb uff den selben  
 tag an gesetzt vnd bescheiden wart diser urteil<sup>42</sup> rede vnd  
 wider rede batt Im hanns mull[er] vrkund lútrung vnd  
 15 erkantnisz brieff ze gebend dz Im ouch vnder min des richters  
 Ingesigel mit einhelig[en] urteil ^ze gebend^ erkent wart von allen denen  
 so hie by warend vnd gefragt wurdend ic<sup>43</sup> datum<sup>44</sup> secunda post<sup>45</sup> Joh[a]nis  
 bap[ist]a[m] anno ic lx<sup>o</sup> testum<sup>46</sup> ic

Item uff mendag nach sant Jacobs tag anno ic ^lx<sup>o</sup><sup>47</sup> komend ~~hant~~ aber  
 20 nach dem obgeschribnen abscheid<sup>48</sup> hanns müller vnd ouch  
 hanns lang fúr vnd In recht / vnd sunder der Streng her[r]  
 Götz heinrich von Eptingen ritter selb personlich In gerichte  
 darstünd vnd etlich brieff missiuen / von dem lantfogte geben  
 In recht hören vnd lesen liesz die da In hieltend uff schlege ^vnd erlengung<sup>49</sup>  
 25 des selben rechten vnd lantages / so der lantfogt darumb  
 dem richter vnd dem rechten geschriben bis zû usz trag<sup>50</sup> des

Der speymen so der gedachte her von wallenstein ist und den still  
her gott hemrich von eptingen ritter mit ein ander bettend //  
daruff hanc nullen aler rechte und reden lief er begerte nütz  
anders den rechte und were auch darumb semlicher lantaz  
nach dem vorrügen abtzeid sin und sinem andertail ange  
setzt darumb er suchet aler also da were und des rechtten erwart  
woltte und getruete mit das sich niemand dawnd hindren nach  
sinen siltte und also nach vil worten sind hanc lantaz sin  
andertail dar und begert an omich den rechtten andan das ge  
rechte man siltte sin umb gottes und des rechtten willen  
gännen und erlaubey ein wort oder wosy ze redend da und  
hanc null den kläger rechte ergetruete mit das er ugit in  
das gericht redon solte er neme auch den einen fursprecher //  
durch den er uff sin klage antwortet und reden siltte und  
silt nütz und nach vil worten wart zu rechte gesetzt was  
darumb billigen and rechte were // wart colent walt  
hanc lantaz ugit reden das zu denen sachen diene oder diene  
runde das er auch den einen fursprecher <sup>nemen</sup> siltte und semliche  
durch den reden lantaz // Off das er auch einen fursprecher  
begert namlichen walt sin siltmiden der in such mit rechte  
zu fursprecher colent wart // zu dem er also wart nam und  
and sin gericht und rechte sind begerte ein lantaz  
des siltwende so der lantazte dem rechtten und dem  
rechtten gestanden hanc und ob man semlichem sinem  
siltwiden gelouben oder dem nach walt lantaz oder mit  
Off das hanc null aler rechte <sup>er</sup> und begert nütz anders  
den rechtten und siner der cristen vngangreij ortail  
und des abtzeids so sin offgelter brieft in hanc das man

Der spennen<sup>51</sup> so der gedacht her[r] von valkenstein a... vnd der selb  
 her[r] götz heinrich von Eptingen ritter mit ein ander hettend //  
 daruff hans muller aber rett vnd reden liesz er begerte nütz  
 anders den[n] recht vnd were ouch darumb semlicher lantag  
 5 nach dem vordrigen abscheid Im vnd sinem wider teil<sup>52</sup> ange  
 setzt / darumb er ouch aber also da were vnd des rechten erwarten  
 wolte // vnd getruwte nit das In iemand darin hindren noch  
 sumen<sup>53</sup> sölte / vnd also nach vil Worten stünd hanns lang sin  
 widerteil dar vnd begert an mich den[n] richter vnd an das ge  
 10 richte man solte Im vmb gottes vnd des rechten willen  
 gönnen vnd erlauben ein wort oder zwey ze redend // da wid[er]  
 hanns mull[er] der kläger rett ergetrúwte nit das er utzit In  
 das gericht reden solte er neme ouch den[n] eînen fursprechen /  
 durch den er uff sin clage antwurten vnd reden solte vnd  
 15 sust nütz // vnd nach vil Worten wart zû recht gesetzt was  
 darumb billichen vnd recht were // wart erkent wolte  
 hans lang utzit reden das zû denen sachen diene oder dienen  
 wurde das er ouch den[n] einen fursprechen ^nemen^ solte vnd semlichs  
 durch den reden lossen / Vff das er ouch eînen fursprechen  
 20 begert namlichen werlin schmiden der Im ouch mit recht  
 Zû fursprechen bekent wart // zû dem er also ratt nam vnd  
 wider fur gericht vnd rette vnd begerte ein[en] luterung  
 des schribends so der lantfogte dem richter vnd dem  
 rechten geschriben hette vnd ob man semlichem sinem  
 25 schriben gelouben oder dem nach wolte komen oder nit  
 Vff das hans mull[er] aber rette ~~vnd~~ ^er^ begert nützit anders  
 den[n] rechtes vnd sunder der ersten v[er]gagnen vrteil  
 vnd des abscheids so sin v[er]sigleter brieff In hielte das man

Dem also fribtag solte nach komen risten und erlömen alle billig were  
also nach vil woorten red und wider rede nach dem und so dy beide zu recht  
lieffend wart erkent das man niemand rechtlos lassen solte/und mochte  
beid partien in zu spruchen mit al sin das so auch den in setzen an  
haben/machend nach Inhalt des ersten abscheide/und also nach  
hanns lang rat und dem wider In und recht durch sinen fursprecher  
wie das heimlich breuff und abscheid so vor erkent und da gelesen  
were luter und klarlichen In helle were sach das In hanns punde  
In dem nechsten Jganigney lantage iuris gerret oder gesimbt  
hette das zu recht giung der antwort were das er auch des ge  
messen solte darumb er such also da stünde und sin antwort  
geben und die künstschafft hören wolte lassen was In zu dem  
ersten lantage gesimbt und gerret hette/und sach also an  
künstschafft an den egenanben sinen herren herzog hemrichen  
des eygen er were/uff das aber hanns mulle rechte wolte er  
iemand mit dem sinen herren dar stellen das er auch den billigen  
nemen solte und fribtag nach hannsich in einand me/der gleichen  
so getruwe er such mit das In herzog hemrich an sinen rechten  
so er In der ersten urteil erlangt hette/ mit sin künstschafft  
kenen schaden bringen solte. In aber hanns lang zu recht und  
meinte man solte herzog hemrichen von ab hören und sagen  
lassen/bedürffe er den jemand me darnach den wolle er auch  
dar stellen/also nach vil rede und wider rede nach dem und  
das beid teil zu recht lieffend wart erkent wolte hant lang  
iemand mit dem sinen herren In künstschafft were dar stellen  
das er auch die nemen solle und fribtag nach hannsich  
niemand andren/und solte man auch herzog hemrichen  
vorab vor hören und sagen lassen/und auff uff heimlich

Dem also fürbasz solte nach komen richten vnd erkennen alls billich were ic  
 also nach vil Worten red vnd wider rede nach dem vnd sy dz beide zû recht  
 liessend wart erkent das man niemand rechtlosz lassen solte // vnd mochtend  
 beid parthien ir zû spruchen nit absin<sup>54</sup> das sy ouch den[n] ir sachen an  
 5 heben / möchtend nach Inhalt des Ersten abscheids<sup>55</sup> // vnd also nam  
 hanns lang ratt vnd kam wider In vnd rett durch sinen fursprechen  
 wie das semlich[en] brieff vnd abscheid so vor erkent vnd dagelesen  
 were luter vnd klärlichen In hielte were sach das In harin sunder  
 In dem nechsten v[er]gangnen lantage útzit geirret oder gesumbt  
 10 hette das zû recht gnûg ver antwûrt were das er ouch des ge  
 niessen solte darumb er ouch also da stünde vnd sin antwort  
 geben vnd die kuntschafft hören wolte lassen was In zû dem  
 ersten lantage gesumbt vnd geirret hette vnd zoch also an  
 kuntschafft an den Egenanten sinen herren her[r] götz heinrichen  
 15 des eigen er were // uff das aber hanns muller rette wolte er  
 iemand me den[n] sinen herren darstellen das er ouch den[n] billichen  
 nemen solte vnd furbas nach harnach<sup>56</sup> niemand me // des gleichen  
 so getruwte er ouch nit das Im her[r] götz heinrich an sinem rechten  
 so er In der ersten urteil erlangt hette / mit sin[en] kuntschafft  
 20 keinen schaden bringen solte Da aber hanns lang zû rett vnd  
 meinte man solte her[r] gotz heinrichen vor ab v[er]horen vnd sagen  
 lassen / bedörffe er den[n] iemands me darnach den welle er auch  
 dar stellen // also nach vil rede vnd wider rede nach dem vnd  
 das beid teil zû recht liessend wart erkent wolte han[n]s lang  
 25 iemand me den[n] sinen herren In kuntschafft wist dar stellen  
 das er ouch die nemen solle vnd furbas nach harnach  
 niemand andren / vnd solte man ouch her götz heinrichen  
 vorab verhören vnd sagen lassen ic vnd ~~ussen~~ uff semlich

Erkenntnis sind her gog heimrich dar recht und sprach by sinem  
eide wie das im sin weiden her petter von mör spring der lantfugte  
geschriben hette wie das er semlichen lantag gegen hangen onuld  
und hams langgen den rechtir und den gerichtir luten zu sffach  
uff ze schreibend geschriben hette / und were auch im meinunge  
das sy darumb furbas mit me rechtir soltend als zu uf tag  
des spars so er und der von wallenstem <sup>zu</sup> ~~mit~~ einander hettend  
und uff semlich geschrifte so gebott durre zugt her gog heimrich  
hangen langgen als dem siner das er zu semlichem rechtir  
und lantag mit lamer solte und seit im da by wie im der  
lantfugte geschriben hette / off das im auch hams langgen antwurte  
her das kan ich mit wol getun und ist das sich her hab  
semlichen lantag versprochen und gerecht darze komend  
und dem gehorrig ze sind und ab ich das mit dote so were ich  
wol das hams muller sinem rechtir mit dest minder  
nach geung und ich des im rechtir gröfflichen engelten wurde  
und mir auch zu grossen schaden komen mochte // und uff semliche  
sprach aber her gog heimrich zu hams langgen ich kan dir mit  
wil sagen ich verbüt dir so hoch ich dir gebietten mag und by  
dinen augen das du hinnen bleibst und mit dar komest und  
tu das ich dich herf wend komest dar und uber settest min  
gebott / so helff mir got ich setze dir din augen uff / und  
uff semlich tröwen und gebott mußt hams lang heimich  
bliben und sinem herzen gehorstan im of daruff nu hams  
lang reden ließ wie er getrunne das er diensthafte gnuß  
im rechtir gebrocht hette da by ein ganz gerichtir wol wer  
stan mochte das im rechtir likes und herzen not hams  
gerecht und gesumt hette und getrunne ~~ich~~ ~~not~~

Erkanntnisz stünd her[r] götz heinrich dar / rett vnd sprach by sinem  
 eide wie das Im sin vetter her[r] petter von mörsperg<sup>57</sup> der lantfogte  
 geschriben hette / ~~wie~~ das er semlichen lantag gegen hansen mull[er]  
 vnd hanzsz langen dem richter vnd den gerichtes lüten zû sissach  
 5 uff ze schiebend geschriben hette // vnd were ouch sin meinunge  
 das sy darumb furbasz nit me richten soltend bis zû usz trag  
 des spans so er vnd der von valkenstein ic ~~mit~~ ^gen^ einander hettind  
 vnd uff semlich geschriffte so gebott diser zuge<sup>58</sup> her[r] gottz heinrich  
 hannsen langen als dem sinen das er zû semlichem rechten  
 10 vnd lantag nit komen solte vnd seit Im da by wie Im der  
 lantfogte geschriben hette / vff das Im ouch hanns lang antwurte  
 her[r] das kan ich nit wol getûn vnd ist das sach Ich hab  
 semlichen lantag versprochen vnd gerett darze komend  
 vnd dem gehörig ze sind vnd ob ich das nit dette so weis ich  
 15 wol das hanns muller sinem rechten nût dest minder  
 nach gieng vnd ich des In recht gröszlichen engelten wurde  
 vnd mir ouch zû grossem schaden komen mochte // vnd uff semlichs  
 sprach aber her[r] götz heinrich zû hanns langen ich kan dir nit  
 vil sagen ich verbût dir so hoch ich dir gebietten mag vnd by  
 20 dinen ougen das du heîmen blibest vnd nit dar komest vnd  
 tû das ich dich heisz wen[n] keinestu<sup>59</sup> dar vnd uber sechest min  
 gebotte / so helff mir gott ich steche dir din ougen usz / vnd  
 uff semlich tröwen vnd gebott müst hanns lang heimen  
 bliben vnd sinem herren gehorsam sin ic daruff nû hanns  
 25 lang reden liesz wie er getruwte das er kuntschafft gnûg  
 In recht gebrocht hette da by ein gantz gerichte wol ver  
 stan mochte das In rechte libes vnd herren not<sup>60</sup> harin  
 geirret vnd gesumbt hette vnd getruwte auch wol d...r

Das er seinlicher Kunstschafft gemessen solte // Daruff aber hanns  
muller recht und reden ließ er getrunote mit das sonlich sage  
Im an sinem rechten künden schaden bringey solte und were  
das sach das her gotz hemrich hanns lingen her und sin eigen  
were darzu ein angehörtes das ein her sinem eigney man  
versprochen und angepuzt recht verbotten solte meinte auch  
er solte In billichen darzu gehalten haben das er sonlichen  
sinem aussprechen gnüg getan hette und dem rechten ge  
hörig were gesin // darzu so herte man wol an dem ersten  
wagangnen kantztag gehört und der absteig dz luter Inhalt  
were das ein wan hanns lingen wegen das selb mal In recht  
gestanden were und hanns lingen aussprechen hette wie  
das In hertzog hainrich an andree ende gesticht hette  
ander sachen zo überend darumb er sonlich gestheffen  
halb mit kanton mochte da wider aber her gotz hainrich  
wz selb geret hette und In sin sage gestit das er In sonliche  
mit gewalt verbotey und hanns lingen kein andre sach  
gesumbe und gewet hette den sin gebott / und lute sonlich  
sag mit dem gleich als hans lang In recht versprochen were  
worden / da by man aber wol iston mochte das es mit anders  
were wend ein verziehen und ein ambereiben der rechten  
darzu so p getrunote er such mit das ein einige Kunstschafft  
zu sonlichem kantztag gnüg solte sin und sinder eine eigin  
herte allein darumb sagen solte und niemand anders / meinte  
auch me dz hanns lingen sonlich sag wider die erste urteil  
ganz und gar nutz schimmen nach helfen solte und ge  
trunote man ließ In bliben by der ersten urteil wie  
vor gemeldet ist // da wider aber hanns lang p reite

Das er semlicher kuntschafft geniessen solte // Daruff aber hanns  
 muller rett vnd reden liesz er getruwte nit das semlich sage  
 Im an sinem rechten keinen schaden bringen solte vnd were  
 das sach das her[r] gotz heinrich hanns langen her[r] vnd sin eigen  
 5 were darzû ein vngehörtes das ein her[r] sinem eignen man  
 versprochen vnd angesetzt recht verbietten solte meinte ouch  
 er solte In billichen darzû gehalten haben das er semlichem  
 sinem v[er]sprechen gnûg geton hette vnd dem rechten ge  
 hörig were gesin // darzû so hette man wol an dem ersten  
 10 vergangnen lantag gehört vnd der abscheid dz luter Inhatt  
 wie das ein[en] von hanns langen wegen das selb mal In recht  
 gestanden were vnd hanns langen v[er]sprochen hette wie  
 das In her[r] götz heinrich an andre ende geschickt hette  
 ander sachen ze werbend / darumb er semlich[en] geschefften  
 15 halb nit komen mochte da wider aber her[r] gotz heinrich  
 ietz selb gerett hett vnd In sin[en] sage geseit das er Im semlichs  
 mit gewalt verboten vnd hanns langen kein andre sach  
 gesumbt vnd geirret hette den[n] sin gebott / vnd lutete semlich  
 sag nit dem glich als hans lang In recht versprochen were  
 20 worden / da by man aber wol v[er]ston möchte das es nit anders  
 were wen[n] ein verziechen vnd ein umbtriben des rechten  
 darzû so ~~er~~ getruwte er ouch nit das ein einige kuntschafft  
 Zû semlichem lantag gnûg solte sin vnd sunder eins eign[en]  
 herre allein darumb sagen solte vnd niemand anders // meinte  
 25 ouch nit dz hanns langen semlich sag wider die erste urteil  
 gantz vnd gar nutz schirmen noch helffen solte vnd ge  
 truwte man liesz In bliben by der ersten urteil was  
 vor gemeldet ist // da wider aber hanns lang ~~er~~ rette



Er getruwte wie das er kuntschafft gnûg hette an sinem  
 herren vnd das Im der gnûg geseit hette da by man wol  
 verstanden hette dz In libs vnd herren not geirret hette  
 darzû so were es lantbrûchig<sup>61</sup> wen[n] einen libs vnd herren  
 5 not irrete das Im das Im rechten hilfflich solte sin // vnd  
 also nach vil red vnd widerrede so da beschach vnd nach  
 dem vnd beid teil das zû recht liessend Wart erkent  
 das hanns lang kuntschafft gnûg ~~hette vnd wol .... hette~~  
~~vnd wol fürbracht was In harin gesumbt vnd geirret hette~~  
 10 hette vnd wol fürbracht das In harin libs vnd herren not  
 geirret hette // Vff semlichs aber hanns lang rates begert  
 vnd kam wider In vnd rett sidmals vnd Im urteil vnd recht  
 erkent hette das Im her[r] götz heinrich sin her[r] gnûg geseit hette  
 so getruwte er auch daby das semlich vordrige urteil so vor  
 15 uber In erkent were worden Crafftlosz vnd abgeten erkent  
 solte werden vnd er die sach uff ein nüws an heben solte  
 vnd liesz da mit zû recht ob dz nit billichen were // wart aber  
 erkent was In der vordrigen urteil uber In von vngehorsam  
 keit wegen er kent were worden vnd er aber vollenklichen  
 20 furbracht hette was In gerret hett das den[n] semlich vordrige  
 urteil sinhalb ab solte sin vnd ~~m~~ iederman sin sachen uff ein  
 nuws an heben solte // Vff semlich erkantnisz stûnden hanns  
 langen burgen dar vnd begerten ires versprechens vnd  
 der vordrigen urteil lidig gezalt werden Vff semlichs wart  
 25 aber kent das sy semlicher urteil vnd versprechens so vor uber  
 sy erkent were worden lidig soltend sin Doch mochte der me  
 gedacht min gnediger herre von valkenstein ic nit ab sin  
 so soltend beid teil uff ein nuws v[er]sprechen vnd burgen geben

So auch ich der richter in namen des vorgedachten minn gnedigen  
 herren von wallenstein von beiden teilen begert und haben wolt  
 Off das so gab hant lang zu rechten rechten bürger die auch für  
 In vsprechtend für hundert lib mit namen heini mullinger  
 Claus mullinger und hannes heilichen Item des gleichen gab hant  
 muller z widerumb ze bürger die och für In vsprechtend  
 Overlin zshudin Claus stellen und clern schünzer of  
 das alles wie vor gemeldet ist begert In hannes muller  
 mit sinen güten freunden und gönnerz lüding und  
 verband ander amn des richters Ingeßel ze gebend dz In  
 auch mit unteil und ob In den ander teil auch begerten  
 wurde erkent wart of dafferruda 17 Jacobi anno 17

hannes muller  
 clage zu hant  
 lang in der  
 herrenschaf ze  
 sticht

Item nach dem and schlichte erkent wart das beide partzhey  
 in sachen uff ein nüne widerumb anheben und in recht  
 bringen soltend Stünd hannes muller der clagen dar  
 und offnete durch sinen fursprecher wie vor das In  
 hant lang In yndem sine lons one recht gemanz und  
 mit gewalt genommen auß verdienlichzey und vnterschult  
 In ada mongliche halb/darzu zu doch weder gimpff  
 noch recht gelocht hette/ und das vnderstanden ze rechtend  
 ze messend und nach sinem mütwillen mit lons ze gant  
 als ob es ont gerecht solte In das In doch sinen güten  
 lumbden/ccc lib und güte berürt und betastet hette/ dee  
 er auch zu mercklichem groffen kosten und schaden Inhalt  
 lomen vore one den argwen und lumbden den er da wan  
 empfangen hette und doch van den gnaden gottes ganz  
 und gericht ~~er~~ finden vore/ und begert In also schlichte  
 freude smach und schand so er In durch schlichte zu ge  
 figt hett wider lernung und wandel ze tünd als er wolt ge

#  
 sinen argwen mütt  
 wolt

Die ouch ich der richter in namen des vorgedachten mins gnedigen  
herren von valkenstein a... von beiden teilen begert vnd haben wolt  
Vff das so gab hans lang zû rechten sichren bûrgen die ouch fûr  
In v[er]sprechend fûr hundert -lib-<sup>62</sup> mit namen heini nollinger  
5 Claus nolling[er] vnd hanns helschen Item des glichen gab hanns  
muller z widerumb ze Bûrgen die vch fûr In v[er]sprechend  
werlin zschudin Claus stellin vnd clewin schûwen a...  
Die alles wie vorgemeldet ist begert Im hanns muller  
mit sinen gûten frunden vnd gönnern lutrung vnd  
10 vrkund vnder min des richters Ingesigel ze gebend dz Im  
ouch mit urteil vnd ab sin der ander teil ouch begeren  
wurde erkent wart ic datum secunda post Jacobi anno lx<sup>o</sup>

Hanns mull[er]s  
clage zu hansen  
langen in der  
houptsach be  
schren /

Item nach dem vnd semlichs erkent wart das beide parthien  
ir sachen uff ein nûws widerumb an heben vnd in recht  
15 bringen soltend Stünd hanns muller der cläger dar  
vnd offnete durch sinen fursprechen wie vor das Im  
hanns lang sin ymlin<sup>63</sup> sins lons<sup>64</sup> one recht ~~genomen~~ vnd  
mit gewalt genomen vnd verdienlichen vnd unverschult  
sin oder menglichs halb // darzû er doch weder glimpff  
20 noch recht gehebt hette / vnd das vnderstanden ze vechtend  
ze messend vnd nach sinem mûtwillen mit vmb ze gond  
als ob es ^valsch vnd^ nit gerecht solte sin das Im doch sinen gûten  
lumbden / ere lib vnd gût berürt vnd betastet hette / des  
er ouch zû merklichem grossen kosten vnd schaden sinhalb<sup>65</sup>  
25 komen were one den argwon<sup>66</sup> vnd lumbden den er da von  
Empfangen hette vnd doch von den gnaden gottes gantz  
vnd gerecht ~~Em~~ funden were / vnd begert Im also semlichs  
freuels smach vnd schand so er Im durch ~~semlichs~~ ^sinen eignen mût willen^ zû ge  
fügt hett wider kerung vnd wandel ze tûnd als er wol ge

truwte Im mit rechte erkent solte werden. Daruff Hanns  
lang die sinen furprecher antworre wou das Hanns mulle  
em proere treffenliche elag uff Im furte die sich dach onem  
erfinden solte das er semliche freuenlichen durch sinen  
erpen genalt geton hette und es hette sich gefiget dz  
em etwas lornes von Im kouffen wolte ~~und~~ dz sinen  
herren zu gehorte und als so in rede mit em ander  
werend von der bejalung wegen reite des zu Hanns  
langen wou ick dz lorn kouff so wou ick das es geid  
zunutzen in die amulm lanne. wou unber amulm hie  
zu Sossach nimbt gar grossen lan da spreche Hanns  
lang mind er dem me den ander amulm antwort  
des so so sagend er hab ein mess dz so als groß das  
stich in ein stertel gangend so gangend gezunzgen  
sinen in em viertel und als er semliche weinme  
gedachte er denen sachen nach und hatt rait darumb  
zu den oer geswornen und zu der gememde und  
was da verhandelt were/das hettend die vier ge  
swornen und die ganz gememde geton und er mit sinen  
und ob Hanns mulle semliche me glauben wolte so ge  
truwte er semliche durch die varenanten vier ge  
swornen und durch die gememde des daruff kintlich  
ze machend und für gebirgend daran em gericht  
em benugene haben solte

Daruff aber Hanns mulle reite sin mess dz were  
gerecht als es sin solte und was da mit verhandelt  
und verchaffen were das hette Hanns lang ~~und~~

- truhte Im mit recht erkent solte werden a... Daruff hanns  
 lang dur[ch] sinen fursprechen antwurte wie das hanns mull[er]  
 ein swere treffenliche clag uff In fürte die sich doch miem[.]<sup>67</sup>  
 erfinden solte das er semlichs freuenlichen durch sinen  
 5 eignen gewalt geton hette vnd es hette sich gefüget dz  
 Ein[er] etwas kornes von Im kouffen wölte ~~vnd~~ dz sinem  
 herren zû gehorte vnd als sy in rede mit ein ander  
 werend von der bezalung wegen rette diser zû hanns  
 langen wie ich dz korn kouff so wil ich das es gen  
 10 Zuntzgen in die mülin kome wen[n] uwer<sup>68</sup> muller hie  
 Zû Syssach nimbt gar grossen lon da spreche hanns  
 lang nimb er den[n] me den[n] ander muller antwort  
 diser Io<sup>69</sup> sy sagend er hab ein mesz dz sy als grosz das  
 sechs in ein fierteil<sup>70</sup> gangend so gangend ze zuntzgen  
 15 sibne in ein vierteil vnd als er semlichs verneme  
 gedechte er denen sachen nach vnd hatt ratt darumb  
 Zû den vier geschwornen<sup>71</sup> vnd zû der gemeinde vnd  
 was da verhandelt were / das hettend die vier ge  
 swornen vnd die gantz gemeinde geton vnd er mit Inen  
 20 vnd ob hanns muller semlichs nit glouben wolte so ge  
 truhte er semlichs durch die vorgeanten vier ge  
 swornen vnd durch die gemeinde des dorffs kuntlich  
 ze machend vnd für ze bringend daran ein gericht  
 ein benügens<sup>72</sup> haben solte  
  
 25 Daruff aber hanns muller rette sin mesz dz were  
 gerecht als es sin solte vnd was da mit verhandelt  
 vnd verschaffen were das hette hanns lang ~~durch~~

Durch sich selfs geton und in anderlic brocht und mit  
denen sachen nach sinem miltwillen umbgangen und  
in dz ymbin genomen und gewesset lassen ander  
weib by andren ymbin messen da by man verstan  
mochte dz er in das ymbin in kemem güeten genomen  
hette sinder in dem syn als ob es mit gerecht solte  
sein und walst solte sein dazzu so mochte er auch furbirgen  
das er in das ymbin selber vorder gehörtten und an  
in er wardret hette da mochte er sine mit vorder geach  
er gebe in dem trostung sin vierzig lib dz mit  
sinem heren ze wblomend und da by ze glöbend dz er  
das ymbin furbas mit vnderen mochte da by man aber  
wohl verstan mochte und metiglich gedendey machte  
dz das ymbin walst und mit gerecht solte sein so mochte  
er auch fur bringey das er das ymbin mes selfs gemacht  
nach machen hette lassen er hette darumb krait ge  
helt zu der abren hand und zu deru fur die sündliche  
traut gehört und inen selfs gestet wie er ein ymbin  
hette dz irze alt und mit one verfürlich anre und  
er bedorffte wol eme neuen ymbins da wurde in  
geratney vord eruf das erfandey und machen und versey  
solte lassen das er auch geton hette und da mit wbandelt  
ze vmsfelden als eukerlichen and recht were dazzu  
so hette hamme lang wol der statt vmsfelden zeichen uff  
dem ymbin gestetey die daz mit andren verseyen noch  
in zeichen daruff brandend daz uff gerecht ymbin und  
moß da by er es wol hette lassen blicen und in mit

Durch sich selb geton vnd In anderlut<sup>73</sup> brocht vnd mit  
 denen sachen nach sinem mütwillen umgangen vnd  
 Im dz ymlin genomen vnd ~~gemessen~~ lossen ander  
 weib by andren ijmlin messen da by man verston  
 5 möchte dz er Im das ijmlin In keinem gûten genomen  
 hette sunder In dem Syn als ob es nit gerecht solte  
~~sin~~ vnd valsch solte sin / darzû so wolte er ouch furbringen  
 das er Im das ijmlin selber wider gehöischen vnd an  
 In er vordret hette da wolte er Ims nit wider geben  
 10 er gebe Im den[n] trostung<sup>74</sup> fûr viertzig -lib- ...<sup>75</sup> mit  
 sinem herren ze v[er]komend vnd da by ze globend dz er  
 das ijmlin fûrbas nit v[er]endren wolte da by man aber  
 wol verston möchte vnd menglich gedencken mochte  
 dz das ymlin valsch vnd nit gerecht solte sin / so wolte  
 15 er ouch fur brîngen das er das ymlin nit selbs gemacht  
 nach machen hette lossen er hette darumb ratt ge  
 hebt zû der obren hand vnd zû denen fûr die semlichs  
~~gort~~ gehort vnd Inen selbs geseit wie er ein ymlin  
 hette dz ~~ir~~ ze alt vnd nit me verfencklich<sup>76</sup> were vnd  
 20 er be dorffte wol eins nuwen ymlins da wurde Im  
 gerotten wo er-e das erfordren vnd machen vnd vechten<sup>77</sup>  
 solte lossen das er ouch geton hette vnd da mit v[er]handelt  
 Ze rinffelden als erberlichen vnd recht were / darzû  
 so hette hanns lang wol der statt Rinffelden zeichen uff  
 25 dem ymlin gesehen die doch mût anders vechten noch  
 ir zeichen daruff brandend den[n] uff gerechte ymlin vnd  
 mesz da by er es wol hette lossen bliben vnd Im nit

Einem heimlichen verclumbdeter luntgestrey gemacht in  
dem er doch gegen menslichen woere gemest unverschult  
und unverdientlicher in oder der sein hals und was er  
als he wete oder für gewent hette das an alle er auch  
für bringen und luntlich machen das zu recht grünc  
woere w

¶ Darcuff hannes lang anwunte als war was er da für  
genommen hette das woere mit sein mitwilligen es  
war als an Ingerwastrey und hette das abhandelt  
durch geheiß sein herrey herzog henrich und durch  
die woere und die gemende daz zu so hette er sine mit  
für walst genemey den allein das es zergroß sitte  
sein nach dem und das an Ingerwastrey woere wie vor

¶ Und zuegend also beid teil uff Einestgafft und legert  
hannes lang und zuecht sich des an herzog henrichen  
von Eptingen sein herrey und an die vier gesessenen  
namlich an meysten huglin Eudm hodelin wocelin  
Gerspach und henry nalling darnach an den samwart  
und an die gericht lute und gemende und namlich  
an elowm emy hannes groff hannes hoffan marzen  
bluht hannes wagt hannes schewer hannes tenger hannes  
tulliker henry lung petter huglin hannes Einest  
Cimrad Schmid wocelin zshudm claus zshudm //  
darnach an wocelin muller von zureggen greber  
von zureggen Brugge von zureggen hansen hodelin

*Einen semlichen verlumbdeten<sup>78</sup> lantgeschrey<sup>79</sup> gemacht In dem er doch gegen menglichem were gewesen unverschult vnd unverdienlichen // sin oder der sinen halb vnd was er also hie rette oder fur gewent<sup>80</sup> hette das wölte er auch*  
 5 *fur bringen vnd kuntlich machen das zû recht gnüg were ic*

*Daruff hanns lang antwurte als vor was er da fur genomen hette das were nit sin mütwill gesin es were also an In gewachsen vnd hette das v[er]handelt*  
 10 *durch geheisz sins herren her[r] gotz heinrichs vnd durch die vier vnd die gemeinde darzû so hette er Ims nit fur valsch genomen den[n] allein das es ze grosz sölte sin nach dem vnd das an In gewachsen were wie vor stat*

*Vnd zugend also beid teil uff kuntschaft vnd begert*  
 15 *hanns lang vnd zach sich des an her gotz heinrichen von Eptingen sinen herren vnd an die vier geswornen namlich an rütsch huglin Rûdin hödelin werlin hersperg vnd heiny nollîng[er]<sup>81</sup> darnach an den banwart<sup>82</sup> vnd an die gericht lute vnd gemeinde vnd namlich*  
 20 *an clewin erny hanns groff hanns hofflin mertzen blüst hanns vogt hanns scherer hanns tenger hanns tulliker heintzy kung petter huglin hanns kûntsch Cûnrad schmid werlin zschudein Claus zschudin // darnach an werlin muller von zuntzgen<sup>83</sup> greber*  
 25 *von zuntzkon Brugg[er] von zuntzkon hansen hödelin*

Item so begert Hamme mull und zuech an künesthafft auch  
an die vier gesprochney eüestig künigk wüden hodelin  
werlin herpferg und hemi hollinger Item darnach  
an werlin schmiden elerwin schurver Hamme brätlin  
Item darnach an anrich den richter hompflin stöcklin  
heinz scholer Item an die gesprochney von umfelden  
die zu semlichen recht gesproch habend und bekantlich  
soltend sin das sy in d' ymlin geben und geuecht  
hattend und es gerecht were

Item and liessend beid teil zu recht ob man inen  
semlich künesthafft mit billichen verhorrey und in  
gerichte sagen solte lasset wart er kont p'mals und  
beid partien an künesthafft zuech das man die auch  
den also darumb verhorren solte in den wartend das sy  
semlich künesthafft mit verstat nemen soltend und wer  
da gerichte wurde das der darumb sagen solte und  
harnach monand me and mächteud so die 17 mal  
haben so soltend solte man sy sagen lasset waerend sy  
aber nu 3 mal mit an gegenwertliche so solten man sy  
beid teil semlich in künesthafft da haben uff dem nechsten  
lantag und der solte sin uff mendedag nächst nach  
sint Bartholmeu tag schreibe künesthafft und alle Hamme  
muller begerte wolliche künesthafft er mit haben nach an  
den selben lantag künigen machte aber den die mit  
machte mit recht sin nemer an den enden da sy wan hafft  
warend und das selbe in tag in geschreifte under des  
richters sigel an die recht künigk das sin auch mit  
urteil zu bekent wart und gabend Hamme urteil ad  
das uff mendedag nach sint Jacobi tag Anno 1465

- Item so begert hanns mull[er] vnd zach an kuntschafft ouch  
 an die vier geswornen Rüttsch huglin rüdin hodelin  
 werlin hersperg vnd heinì nollinger / Item darnach  
 an werlin schmiden Clewin schuwen hanns brötlin
- 5 Item darnach an mich den richter hennslin schöiblin  
 heinzy scholer Item an die geswornen von rinfelden<sup>84</sup>  
 die zû semlichem vecht gesworn habend vnd bekantlich  
 soltend sin das sy Im dz ymlin geben vnd geuecht  
 hettind vnd es gerecht were
- 10 Item vnd liessend beid teil zû recht ob man Inen  
 semlich kuntschafft nit billichen verhoren vnd In  
 gerichte sagen solte lossen / wart er kent sid mals vnd  
 beid parthien an kuntschafft zugend das man die ouch  
 den[n] also darumb verhoren solte In den Worten das sy
- 15 semlich kuntschafft wie vorstat nemen soltend vnd wer  
 da genembt wurde das der darumb sagen solte vnd  
 harnach niemand me vnd möchtend sy die ietz ze mal  
 haben so ~~soltend~~ solte man sy sagen lossen werend sy  
 aber nû ze mal nit in gegenwirtikeit so solten ~~man sy~~
- 20 beid teil semlich ir kuntschafft da haben uff dem nechsten  
 lantag vnd der solte sin uff mendag nechst nach  
 sant Bartholmig tag schierest kunfftig vnd als hanns  
 muller begerte weliche kuntschafft er nit haben noch an  
 den selben lantag bringen mochte ob er den[n] die nit
- 25 mochte mit recht fur nemen an den enden da sy wonhafft  
 werend vnd da selbs Ir sag In geschriffte vnder des  
 richters sigel an die recht bringen / das Im ouch mit  
 urteil zû bekent wart ic vnd gobend harin urteil ic  
 Datum uff mendag nach sant Jacobs tag Anno ic lx<sup>o</sup>

Der drit lantag uff mendedag nach Bartholmai  
Anno 1482

tem nach dem vordrigen absteid bestgeben uff mendedag  
nach sint Jacobs tag anno 1482 komend beid partthey  
darnach uff mendedag nach sint Bartholmaes tag vnder  
fir recht vnd by sunden hanns muller mit sinen guten  
frunden vnd gonnern vnd lies also durch sinen fursprecher  
reden wie etlich orteil so vormalt in diesen sachen geben  
vnd erkent vordem vordem ab man in der ant billich  
kürung vnd vorkunde geben solte nach dem vnd er das  
vormalt such er vordem hette //

voral

Da vnder mit hanns lang durch sinen fursprecher  
reden liez vnd begert man solte dem nechsten absteid  
nach komer der da luter in hichte wie das man künstschafft  
so for so sich zu beiden teiley er bottey hettend vorkunnen  
solte darvnt er such also da stünde vnd in künstschafft  
da hette vnd begerte das man in die vorkunnen solte vnd  
dem darnach redeman gelangen solte dz billich vnd  
recht were // Also nach rede vnd vnder vnde vnd vil  
worten so da bestgachend vnd nach dem vnd beid teil  
das zu recht lieffend vnter mit der meyer orteil vnd  
vormalt bekent were in dem nechsten vorkunnen absteid  
welcher teil des vorkunde vnd vorkunde beuoff begertend were  
das man in such die von ab geben solte / vnd darnach  
machend also beid teil in künstschafft dar stellen vnd in  
sachen vnder an haben

Vff das hanns muller durch sinen fursprecher vorte vnd  
in clag an ~~hanns lang~~ an haben vnter wie von  
Dazu hanns lang wie vnd antvurt wie das hanns muller  
in klage vormalt nach notirefft geten er such daruff ge  
antvurt vnd in nachrede geten vnd penliche als wie

*Der dritt lantag uff mendag nach bartholmei*

*Anno ic lx<sup>o</sup> 85*

*Item nach dem vordrigen abscheid beschehen uff mendag  
nach sant Jacobs tag anno ic lx<sup>o</sup> komend beid parthien*

- 5 *darnach uff mendag nach sant Bartholmei tag wider  
für recht vnd by sunder hanns muller mit sinen gûten  
frunden vnd gönnern vnd lies also durch sinen fursprechen  
reden wie etlich urteil so vormals In disen sachen geben  
vnd erkent werend worden ob man Im der nit billich  
10 lutrung vnd vrkunde geben solte nach dem vnd er das  
vormals ouch er vordret hette //*

*Da wider nû hanns lang durch sinen fursprechen  
reden liesz vnd begert man solte dem nechsten abscheid  
nach komen der da luter In hielte wie das man ^die^ kuntschafft*

- 15 *so ~~sieh~~ sy sich zû beiden teilen er botten hettend verhoren  
solte darumb er ouch also da stünde vnd sin kuntschafft  
da hette vnd begerte das man Im die ^vorab^ v[er]horen solte vnd  
den[n] darnach iederman gelangen solte dz billich vnd  
recht were //* Also nach rede vnd wider rede vnd vil  
20 *worten so da beschachend vnd nach dem vnd beid teil  
das zû recht liessend wart mit der meren urteil ^erkent^ was  
vormals bekent were ^vnd^ in dem nechsten vergangnen abscheid  
welicher teil des vrkund vnd v[er]siglet brieff begerend were  
das man Im ouch die vor ab geben solte / vnd darnach  
25 mochtend also beid teil ir kuntschafft dar stellen vnd ir  
sachen wider an heben*

*Vff das hanns muller durch sinen fursprechen rette vnd  
sin clag an ~~hûb wie vor wie~~ an heben wolt wie vor*

- Darzû hanns lang rett vnd antwort wie das hanns mull[er]  
30 sin klage vormals nach noturfft geton er ouch daruff ge  
antwort vnd sin nach rede geton vnd semlichs als wÿt<sup>86</sup> als*

laman das sy beid in kunsthafft uff den selben tag da haben  
und stellen sitzend/darumb er also da wære und in kunsthafft  
~~und~~ hören wolte lossen uff die clage so er zu in geton hette  
und getruete wöl man verhorde in in kunsthafft vor ab des  
ersten und by sünden sinen herren herzogz heimrichen

Off semliche her <sup>W</sup>ogheimrich selber recht und manigenley  
warren darin lousen ließ vor hamme smuller das ymb  
selb gen einfelden getragen und machen hette lossen und ander-  
lute darin ze rat genomen und denen die sachen sin geleit  
zenen es mit gebirte nach zu gehorte und es wære in ein  
intrag siner gerechtikeit wönd semlich sachen gehorend in  
zu und drentend sinen gerichtien und mit den hachen gerichtien  
und er hette billich die sinen darin ze rat genomen und  
monand andren da by man wöl mach<sup>en</sup>by mache sinen güeten  
wölley das er me genügt wære an andre <sup>ende</sup> ~~gerichte~~ wönd an  
die ende da him es gehorte

S aruff hamme mull aber antwurte er hette mit andere  
geton wönd das billichen wære und sünden die darumb ge-  
fragt für die es gehort wöste auch monand andren darumb  
ze fragend nach ze ratte ze nemend den die selbey und man  
verstünde by semlichen warren wöl so herzogz heimrich da  
rette das er die sachen ander stunde ze verantwurten und zu  
sinen gerichtien ze richtend das er auch semlich sachen des  
für ze nemend da by man wöl warren mochte das er doch  
selb ein sacher sacher in dyen sachen wære und in aber hamme  
lang mit für einen zugen dar stalt da er mit getruete das  
er ugr in dyen sachen sungen nach dchein kunsthafft darumb  
geben solte und ließ auch das da mit ze recht ab das mit billichen  
wäre das er in dyen sachen müßig gen solte

A  
und hamme lang  
mit in

41 komen das sy beid ir kuntschafft uff den selben tag da haben  
und stellen soltend / darnumb er also da were und sin kuntschafft  
und hören woltelossen uff die Clage so er zü Im geton hette  
und getruwte wol man verhorte Im sin kuntschafft vor ab des  
5 ersten und by sunder sinen herren her[r] getz heinrichen  
Vff semlichs her[r] Götzheirich selber rett und mangertley  
worten darin louffen liesz wie hanns Müller das ymlin  
selb gen Rinsfelden getragen und machen hette lossen und ander  
lute darin ze rot genommen und denen die sachen fur geleit  
10 denen es nit geburte noch zü gehorte und es were Im ein  
Intrag siner gerechtikeit wen[n] semlich sachen gehortend Im  
Zü und dientend sinen gericht und nit den hohen gericht<sup>87</sup>  
und er hette billich die synen darin ze ratt genommen und  
niemand andren // da by man wol merken mochte sinen güten  
15 willen das er me geneigt were an andre ~~ge~~ht <sup>ende</sup> wen[n] an  
die ende da hin es gehorte

Daruff hanns mull[er] aber antwurte er hette nut anders  
geton wen[n] das billichen were und sunder die darnumb ge  
20 fragt fur die es gehort wissete ouch niemand andren darnumb  
Zefrogend nach ze ratte ze nemend den[n] die selben und man  
verstünde by semlichen worten wol so her[r] gotz heinrich da  
rette das er die sachen vnder stünde ze verantworten und zü  
sinen gerichtzen ze zeichend das er ouch semlich sachen des  
25 ymlins halb mit hanzsz langgen <sup>und hanns lang mit Im</sup> verschafft hette ze tünd und  
fur ze nemend da by man wol verston mochte das er doch  
selb ein ~~stehet~~ sacher in disen sachen were und In aber hanns  
lang nü fur einen zugen dar stalt da er nit getruwte das  
er utzit in disen sachen sagen nach dehein kuntschafft darnumb  
geben solte und liesz ouch das da mit ze recht ob das nit billichen  
30 were das er In disen sachen müssig gon solte

Und aber nachvil worten so da besthohend wart colent das  
her Gotz heimrich in denen sachen der kunstschafft halb  
müßig solte gon und nütz darumb sagen solte

Vff seinlich erkantung sind her Gotz heimrich uff und sprach  
sid male er laut were worden das er nit darumb sagen mocht  
hammen langen kein kunstschafft geben solte so wolte er daz  
zu im stan als zu dem siner und wolte im dz best wachen  
und helfen und begert also man solte hammen langen  
sinem fursprechen und im rat gönnen zemenend und sich  
mit ein ander am ze vnder redend was so für haff im recht  
woltend bringen

Und komend also vnder im condrett hamme lang durch siner  
furspreche Sid male und im her Gotz heimrich ab bekennt  
ware worden so fründe er daz also da und begert sich ze wa  
antworten uff hamme nullers clage was war das er seinliche  
als hamme nuller uff im klagt hette mit mit freuel nach durch  
siner gewalt geton hette sinder so were seinliche durch die  
gemende und die vnder geswamten an im erwarteten und  
durch die were ee zu gangen und nit durch im alson darzu  
so were noch einand auf im ere geton nach geacht nach  
gesprachen das ee walte solte im und die sach were mit halb  
so groß als er die für gewant hette und begert darumb im zügen  
ze stehend und die ze wöhrend

Auff aber hamme nuller seit hamme lang wolte nit die sachen  
kein machen und also mit siner worten domer wösten das  
aber im eben siner und groß im sinem hertzen beduncke und  
were das sach solte das im kein angericht oder walte finden  
im werden mochte man wol merken was im darumb uff  
erstanden oder zu wachsen were so erstund man daz da

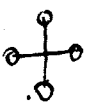
Vnd aber nach vil worten so da beschohend wart erkent das  
 her[r] Gotz heinrich in denen sachen der kuntschaft halb  
 müssig solte gon vnd nütz darumb sagen solte a...

Vff semlich erkantnisz stünd her Götz heinrich uff vnd sprach  
 5 sid mals er kant were worden das er nüt darumb sagen noch  
 hannsen langen kein kuntschaft geben solte so wolte er doch  
 Zü Im ston als zü dem sinen vnd wolte Im dz best raten  
 vnd helffen vnd begert also man solte hannsen langen  
 sinem fursprechen vnd Im rat gönnen zenemend vnd sich  
 10 mit ein ander ~~vñ~~ ze vnder redend was sy fur basz In recht  
 woltend bringen

Vnd komend also wider In // vnd rett hanns lang durch sinen  
 fursprechen Sid mals vnd Im her[r] Götz heinrich ab bekent  
 were worden / so stünde er doch also da vnd begerte sich ze ver  
 15 antwurten uff hanns mullers Clage wie vor das er semlichs  
 als hanns muller uff In klagt hette nit mit freuel noch durch  
 sinen gewalt geton hette sunder so were semlichs durch die  
 gemeinde vnd die vier geschwornen an In erwachsen vnd  
 durch die were es zü gangen vnd nit durch In allein darzü  
 20 so were noch niemand an sin ere geton noch gerett noch  
 gesprochen das es valsch solte sin vnd die sache were nit halb  
 so grosz als er die für gewant hett vnd begert darumb sin zügen  
 ze stellend vnd die ze v[er]hörend

Daruff aber hanns muller rett hanns lang wolte nû die sachen  
 25 klein machen vnd also mit sinen worten dennen meschen // das  
 aber Im eben swer vnd grosz In sinem hertzen bedunkte vnd  
 were das sach solte das ymlin vngerecht oder valsch fünden  
 sin worden möchte man wol merken was Im dar von uff  
 erstanden oder erwachsen were // so verstünd man ouch da

by wal dabanne lang das ymlin vorstüß im uff der mülin  
ze tragend und das im dorff vnder und für ze by andrey  
messen ze bejgend und ze messend des gleichen das  
heimlich gebietend ze haltend und da er das vernam und  
das ymlin vnderumb von im erwardet und im das  
hanns lang mit geben wolt er gebe den <sup>den</sup> dorff  
für vierzig lib mit sinem herren ze wolkend des gleichen  
er im auch an müete ze glöbend dz ymlin mit ze ver  
endend und dz bliben lassen als war da by man aber wal  
machen und verstan machte das im das ymlin in keinem  
güeten genomen sinder das es als vil als vngerecht und  
valstly geziget wae wardet anders man hette ime in  
der mülin gelösty vnder sätze als er und im vordrey das  
ic und ic gehölet hetend / darzu so hette er es mit heimlich  
nach selb gemacht den sinder darumb rot gehebt und an  
billiche end bracht da das im gehört und dem alten nach  
lassen machen durch die geswarney ze emffelen die dar  
zu geordnet sind sinder begert auch dz man im im kunsthafte  
verhören und sagen wolt lassen

  
Also nach vil worten red und vnder rede und nach  
verhörung der kunsthafte beder parthey und nach  
dem vnd so das beide zu recht lieffend fragt ich der richter  
was darumb recht were / uff semlich frag nam sich der  
firsprecht den ich gefragt hatt mit dem gericht ze  
bedenelend und nach langem bedenken komend so  
vnder In vnd red der firsprecht vnd so der mer teil  
mit im vore das es dz waer ist und spat wae und  
ni ze mal semlicher vortel mit wijs nach bedacht  
warend uff ze sprechend und so woltend sinder mit  
darumb nemen und sinder die kunsthafte so da gestre  
hetend das man die beschriben folge von vort zu vort

- by wol da hanns lang das ymlin verschüff Im usz<sup>88</sup> der mûlin  
 Ze tragend vnd das Im dorff wider vnd fûr ze by andren  
 messen ze beÿglend vnd ze messend des glichen das  
 heimlich gebietend ze haltend vnd da er das vernam vnd  
 5 das ymlin widerumb von Im ervordret vnd Im das  
 hanns lang nit geben wolt er gebe den[n] vortrostung  
 fûr vierzig -lib- mit sinem herren ze v[er]komend des glichen  
 er Im ouch an mûtete ze globend dz ÿmlin nit ze ver  
 endrend vnd dz bliben lossen als vor da by man aber wol  
 10 merken vnd verston mochte das Im das ymlin in keinem  
 gûten genomen sunder das es als vil als ungerecht vnd  
 valsch gezigen were worden anders man hette Ims In  
 der mûlin gelossen vnersûcht als er vnd sin vordren das  
 ie vnd ie<sup>89</sup> gehebt hettind / darzû so hette er es nit heimlich  
 15 noch selb gemacht den sunder darumb rat gehebt vnd an  
 billiche end brocht da das hin gehort vnd dem alten nach  
 lossen machen durch die geswornen ze Rinnfelden die dar  
 Zû geordnet sind // vnd begert ouch dz man Im sin kuntschafft  
 verhören vnd sagen wolte lossen a...
- 20 Also nach vil Worten red vnd wider rede vnd nach  
 verhörung der kuntschafft beder parthyen vnd nach  
 dem vnd sy das beide zû recht liessend fragt ich der richt[er]  
 was darumb recht were // uff semlich frag nam sich der  
 fursprech den ich gefragt hatt mit dem gerichte ze  
 25 bedenckend vnd nach langem bedencken komend sy  
 wider In vnd rett der fursprech vnd sy der merteil  
 mit Im // wie das es ~~da~~ vast abend vnd spat were vnd  
 nû ze mal semlicher vrteil nit wijs nach bedacht  
 werend usz ze sprechend vnd sy woltend furbasz ratt  
 30 darumb nomen vnd sunder die kuntschafft so da geseit  
 hettind das man die beschriben solte von wort zû wort

Eigentlichen wie die luter und gestit was worden und  
solte alle die in harn gestit heind uff puntag nicht  
kunfft zu Syrach zu dem striben künny und dem in  
sag eigentlichen an gebey der in auch also darvortey  
solte und die warhoren und nach aller noturfft beschriben  
und von das bestliche so solte der striben die selbe ge  
stribte darnach uff puntag vor unser lieben frowen tag  
naturtal vor zeyn hie nach gemeldetey urteil sprachen  
hören lassen und frunde der striben gestribt als billich  
und die zugen gestit heind so mochten so die gestribte  
und die sag nennen und was darumb sichey was so be  
duncken wolte gut sin und darnach einen andren tag  
an setzen und beiden partyen by zyt darzu warlunden  
und in urteil luter und gebey

tenung

Item und ist die hie nach gestriben die sag und  
kinstschafft so darumb gestit ist worden

by laugen kün  
schafft

Item des ersten rüestig hingen harn laugen zug ist verhort  
und hat gestit das er da ze mal der vier gesvarenen emen  
wece und es sich fügen wurde das er und sin mit gestilley  
by ein ander in harn laugen stuben warend und sich all  
ley mit ein ander vnder vortend vran cymungen vrogen  
und vnder allen vortey hüb harn lang uff und sprach  
lieben frunde vossend in nüt mir ist eigentlicher furkamen  
wie harn miltter ein nuro meß gemacht sol haben

44

*Eigentlichen wie die lutet vnd geseit were worden vnd  
soltend alle die so harin geseit hettind uff suntag nechst  
kunfftig zû Syssach zû dem schriber komen vnd dem ir  
sag eigentlichen an geben der ir ouch also da warten*

- 5 *solte vnd die verhören vnd nach aller noturfft beschriben  
vnd wen[n] das beschehe so solte der schriber die selbe ge  
schrifft darnach uff suntag vor vnser lieben frowen tag<sup>90</sup>  
natuutatum<sup>91</sup> vor disen hie nach gemeldeten urteil sprech[e]n  
hören lossen / vnd stünde den[n] semlich geschrifft als billich*
- 10 *vnd die zûgen geseit hettind so mochten sy die geschrifft  
vnd die sag nemen vnd ratt darumb sûchen wo sy be  
duncken wolte gût sin vnd darnach eînen andren tag  
an setzen vnd beiden parthyen by zÿt darzû verkunden  
vnd ir urteil lutren vnd geben*

*tertig<sup>92</sup>*

- 15 *Item vnd ist die hie nach geschriben die sag<sup>93</sup> vnd  
kuntschafft so darumb geseit<sup>94</sup> ist worden*

*H langen<sup>95</sup> kunt  
schafft*

- Item des ersten Rûtsch hûglin hanns langen zug ist verhört  
vnd hatt geseit das er da ze mal der vier geswornen einer  
were vnd es sich fügen wurde das er vnd sin mitgesellen<sup>96</sup>*
- 20 *by ein ander In hanns langen stuben warend vnd sich aller  
ley mit ein ander vnder rettend von eijnungen wegen<sup>97</sup>  
vnd vnder allen worten hûb hanns lang uff vnd sprach  
lieben frûnde wissend ir nût mir ist eigentlichen furkomen  
wie hanns muller ein nûw mesz gemacht sol haben*

Und das ist also groß dz mit me dem sechß in ein fiertel  
gangend und aber ze zuntzen und andressen gant  
sibne in ein fiertel und das hatt mir heiney leimer  
und klein hamme schneider von oltingen gestit darzu  
so hatt mirs Claus nollinger auch gestit das er das  
von steinbruchel auch gehort hat wie hamme mullers  
meß ze groß so uff das anruuert im rütstz huzen  
dysen zuge trerlich uth weez mit wil darumb den  
das wirben red im darff offenwegen gat die daruff  
redend er hab ein niw meß gemacht und das so x groß  
ob aber das also so oder mit weis uth mit ~~da~~ da rett  
hamme lang das geburte und gehorte minem heren  
an ze bringend dach so gebürt uth uth by den eiden das  
in heimliche heimlich haltend und by uth bliben lösend  
bis uth an minem heren bringend und darnach bald  
kam her ganz heimlich gen Esstach und da nam hamme lang  
dysen zugis und die andren von den vortey und den  
Bamvart zu im und leit sinem heren die sachen für  
und also sthelt her ganz heimlich den Bamvart nach dem  
ymlin und besachend und moßend das und fundend  
dz mit me dem sechß in ein fiertel gangend und aber  
andere ymlin sibne in ein fiertel gangend ~~stach~~ her ganz  
heimlich ni stat der stat am felden zeuchen gar erbarlich  
daruff darumb so rotend wie man in dysen sachen tu wurd  
in bedorffend mit gedencen das ee min stach so ~~wen~~ uth  
malen wenig her darumb so lügend wie man im tu  
da rett dysen zuge vnder allen worten uth hab wol ewen  
gesehen und gehort wend man heimlich dysen ee wend  
bestrecken oder nulla meß was sachen und besachend malt  
so beualch man das x einem voggt und da nam emey  
oder zwen mit im und rügende gen am felden und

45

und das ist also grosz dz nit me den[n] sechszy in ein fierteil  
ganged vnd aber ze zuntzken vnd andrrsswo<sup>98</sup> gond  
sybne in ein fierteil vnd das hatt mir heintzy leimer  
vnd klein hanns schnider von oltingen geseit darzû  
5 so hatt mirs Claus nollinger ouch geseit das er das  
von steinbrûchel ouch gehort hab wie hanns mullers  
mesz ze grosz sy uff das antwurt Im rûtsch huglin  
diser zuge werlich<sup>99</sup> ich weisz nit vil darumb den[n]  
das wiben red Im dorff affter wegen gat<sup>100</sup> die darusz  
10 redend er hab ein nûw mesz gemacht vnd das sy ze grosz  
ob aber das also sy oder nit weisz ich nût ~~vmb~~ da rett  
hanns lang das geburte vnd gehorte minem herren  
an ze bringend doch so gebût ich uch by den eiden das  
ir semlichs heimlich haltend vnd by uch bliben lossend  
15 bis ichs an minen herren bring vnd darnach bald  
kam her[r] gotz heinrich gen Sysrach vnd da nam hanns lang  
disen zûgen vnd die andren von den vieren vnd den =  
Bannwart zû Im vnd leit sinem herren die sachen fûr  
vnd also schikt her[r] gotz heinrich den ban[n]wart nach dem  
20 ymlin vnd besachend<sup>101</sup> vnd mossend<sup>102</sup> das vnd fundend  
dz nit me wen[n] sechszy in ein vierteil giengend vnd aber  
andrer ymlin sibne in ein fierteil giengend sprach her[r] gotz  
heinrich nû stat der statt rinfelden zeichen<sup>103</sup> gar Erberlichen  
daruff darumb so rottend wie man In disen sachen tû wen[n]  
25 ir bedörffend nit gedencken das es min sach sy wen[n] ich  
malen wenig hie // harumb so lûgend wie man Im tû  
da rett diser zuge vnder allen Worten ich hab wol etwen  
gesehen vnd gehort wen[n] man semlich ding es werend  
brotbecken<sup>104</sup> oder muller mesz // versûchen vnd besechen wolt  
30 so beualch man das ¶ einem vogt vnd der nam einen  
oder zwen mit Im vnd trûgends gen Rinfelden vnd

lieffend das die gefroornen beftigen traxet es den gerecht  
finden so lieff mans gutt fm was es aber mit gerecht so dote  
man aber alle billigen ware of rind also rett hartgatz heinrich  
darzu ond gefiel jm wol ond sprach van. wend jm auch  
also ein ond empfahlich dem coogt das er zooven van den  
woren zu jm neme ond dz ymlin gen. beifelder trugend  
ond sich eigentlichen darumb er furend an den gefroornen  
ab so das ymlin gemacht ond gebachten hettid durch  
sich selbe oder von einem alen oder ab spen das hame  
nuller durch sich selbe also groß befulhen hettid ze machend  
ond auch dz so ha<sup>er</sup> wunnen cruchstern rante darind haben  
stehend umb dz jemand zu gerecht wurde dz jm ~~anulichen~~  
von belichten oder fm eid oder fm ere beruete

Item wuden hodelin hame langenzug ist wihart ond hattigeste  
wie dz er auch daz mal den woren end wore ond es sich  
singen wurde dat swan hame langen stuben by em ander  
worend ond sich aller by mit em ander wunden rettend van  
eynungen wegen ond under allen worten sprach hame  
lang lieben frund mir ist fun kamey wore hame nuller  
em miro mess gemacht hab dz ze groß so ond ganz meine  
den sechs in em <sup>da</sup> wiertel ond ist ander messen sibe in  
em wiertel yangen ist wihulz darumb wistij wend uch  
hab es gehart von hontz lenner wank<sup>er</sup> ond van klein hame  
schmider von obingey ond van etlichen mit also warantwurt  
dz der wandry zuge so wisten mit vil dar von ze sagend  
dew das er van wiben deding semliche gehart hett

liessend das die geswornen besechen wart es den[n] gerecht  
 funden so liesz mans güt sin was es aber nit gerecht so dett<sup>105</sup>  
 man aber als billichen was ...<sup>106</sup> vnd also rett her[r] gotz heinrich  
 darzü vnd gefiel Im wol vnd sprach wir wend Im ouch  
 5 also tûn vnd Empfolch dem vogt das er zwen<sup>107</sup> von den  
 vieren zû Im neme vnd dz ymlin gen Rinfelden trügend  
 vnd sich eigentlichen darumb er fürend an den geswornen  
 ob sy das ymlin gemacht vnd gevochten hettind durch  
 sich selbs oder von einem alten oder ob Inen das hanns  
 10 muller durch sich selbs also grosz befolhen hette ze machend  
 vnd ouch dz sy her[r] wernher truchsessen<sup>108</sup> ratte darin haben  
 soltend umb dz niemand zû gerett wurde dz Im ~~vnerlichen~~  
 vn Erlichen<sup>109</sup> oder sin eid oder sin ere berürte

Item rüdin hödelin hanns langen zug ist v[er]hort vnd hatt geseit  
 15 wie dz er ouch da ze mal der vieren ein[er] were vnd es sich  
 fügen wurde das sy in hanns langen stuben by ein ander  
 werend vnd sich aller by mit ein ander vnder rettend von  
 Eynungen wegen vnd vnder allen worten sprach hanns  
 lang lieben frund mir ist fur komen wie hanns muller  
 20 ein nûw mesz gemacht hab dz ze grosz sy vnd gang nit me  
 den[n] sechsy in ein vierteil ~~vnd~~ ^da^ sust andrer messen sibne in  
 ein vierteil gangen ist uch utz darumb wissen wen[n] ich  
 hab es gehort von heintz leimer ~~von~~ vnd von klein hanns  
 schnider von oltingen vnd von etlichen me also vorantwurt  
 25 dz der vordrig zuge sy wisten nit vil dar von ze sagend  
 den[n] das er von wiben deding<sup>110</sup> semlichs gehort hette

Im dorff affen wengen an es aber also war wisse er mit wett  
hamm lang schlichte gebürt und gehört mit dem herren  
an ze künigend dach gebürt us gut by den eiden schlichte in  
geheim ge haltend und niemand nutz da von gesagend  
die utze in dem herren an bring darnach bald kam in her  
nam hamme lang duse zügen und die andrey geswamen  
zu in und leit die sache in dem herren für also steht der her  
den Barmherten nach dem in lin und besprechend das  
und finden das es als groß was dz mit me dem setz  
in ein fiertel giengend und wie den warden zuge von  
gestit also waant die sache nach handelt und mit andere  
und da by und mit ist duse zuge groß

Item si wörlin herren hamme langens zuge ist wörlant und  
hat gestit dz er auch da ze mal der wörlen end was und es  
schicht schiken wurde dz sy in hamme langens stuben by ein ander  
wörlend von etlicher synungen wörlen hieß hamme lang uff  
wörlen allen wörlen und spreche lieben frunde spruch us ze  
wörlend wörlen si schiken wie hamme mulle er und hieß  
in wörlen us gon und spreche darnach lieben frunde es grand  
etliche reden in dorff affen wengen spruch us ze kunt darumb  
wörlen sy mein wir wörlend mit wett hamme lang so ist aber wir  
wörlend und für kam wie hamme mulle ein mess hab dz  
ze groß sy und dz ist wir von den herren herren namlich herren  
kennet herren stunden von obingen und stembuchel ge

47

*Im dorff affter wegen gen ob es aber also were wisst er nit rett  
hanns lang semlichs geburt vnd gehört minem herren  
an ze bringend doch gebût ich uch by den eiden semlichs In  
geheïm ze haltend vnd niemand nutz da von ze sagend  
5 bis ichs minem herren an bring darnach bald kam sin her[r]  
nam hanns lang disen zügen vnd die andren geswornen  
Zû Im vnd leit die sach sinem herren für also schickt der her[r]  
den Banwarten nach dem ymlin vnd besachend das  
vnd funden das es als grosz was dz nit me den[n] sechs  
10 in ein fierteil giengend // vnd wie der vordrig zuge vor  
geseit also wart die sach verhandelt vnd nit anders  
vnd da by vnd mit ist diser zuge gesin*

*Item s werlin hersperg hanns langen zuge ist verhort vnd  
hatt geseit dz er ouch da ze mal der vieren ein[er] were vnd es  
15 sich schiken wurde dz sy in hanns langen stuben by ein ander  
worend von etlicher Eynungen wegen hûb hanns lang uff  
vnder allen Worten vnd ~~spreche lieben fründ ist uch utz ze~~  
~~wissend mir ist fürkomen wie hanns muller ein~~ vnd hiesz  
sin wip hin usz gon vnd sprech darnach lieben fründe es gand<sup>111</sup>  
20 etlich reden Im dorff affter wegen ist uch utzit kunt darumb  
retten sy nein wir wissend nût rett hanns lang so ist aber mir  
wissend vnd für komen wie hanns muller ein mesz hab dz  
Ze grosz sy vnd dz ist mir von den ~~hæb~~ hodlern<sup>112</sup> namlich heintz  
leimer klein hans schnider von oltingen vnd steinbruchel ge*

klagt worden und fragt sy aber by men eiden ob sy uer  
namen da van hertend anwunt. In rütsch huylen da  
vorangeit zuge uch hab oval gehort von wiben deding  
In darff omb gon wie er ein nuw mess gemacht hab ab ala.  
das ze groß oder ze klein sy wisse er mit also verbott er inen  
by den eiden heimlich ze haltend bis ers an inen  
herren brechte also bald kam der her und da nam hamme  
langz duff zugty und in gesellen und den bannwart zu  
in und leit die sach inen herren für und der her begert rates  
zu duff waren landen sy in mit oval geratey also rüft da  
had dem gericht und allen denen dargu die er gehalten mocht  
und hat von rate darin und wie rütsch huylen van gestet  
hat wie das mess gen vmploey ze fürend empfolhen want  
und die gesvarney darumb ze fragend und a uch her vromes  
truchsp rat darin zemenend vmb dz niemant zu gret  
wunde dz mit billichy wie das het duff zuge als van ha  
tz hoinritzen gehout wie die vordrige sy lutt und  
in halct

Item heini nollinger hamme langz zuge was auch da ze mal  
der wieren emen ist verhort und hat gestet wie dz sy in  
hamme langz stuben by ein ander woiend und wie hamme langz  
uff huf und sprach lieben frunde es gat etliche rod und  
sachen in duff affter wegcy und ist das von hamme muller  
wegen ist mir geklagt worden er hab ein mess das ze  
gras sy das mit me den sech in ein viertel gangend so  
ist andrer messen plene in ein viertel gangend ist uch gut  
dammit wissen wand es mir von hontz lema und klein

Klagt worden vnd fragt sy aber by iren eiden ob sy utz ver  
 nomen da von hettind antwurt Im rütsch huglin der  
 vogenant zuge ich hab wol gehort von wiben deding  
 Im dorff vmb gon wie er ein nûw mesz gemacht hab ob aber  
 5 das ze grosz oder ze kleîn sy wisse er nit / also verbatt er Inen  
 by den eiden semlichs heimlich ze haltend bis ere an sinen  
 herren brechte also bald kam der her[r] vnd da nam hanns  
 lang disen zugen vnd sin gesellen<sup>113</sup> vnd den bannwart zû  
 Im vnd leit die sach sinem herren fûr vnd der ^her^ begert rates  
 10 zû disen vieren konden sy Im nit wol geraten also rûfft der  
 her[r] dem gericht vnd allen denen darzû die er gehalten mocht  
 vnd hatt wen ratt darin / vnd wie rütsch huglin vor geseit  
 hatt wie das mesz gen Rinfelden ze fürend empfolhen wart  
 vnd die geswornen darumb ze fragend vnd auch her[r] wernh[er]  
 15 Truchsesz ratt darin zenemend vmb dz niemand zû gatt<sup>114</sup>  
 wurde / dz nit billichen were das het diser zuge als von her  
 gotz heinrichen gehort wie die vordrige sag lutet vnd  
 In haltet

Item heini nollinger hanns langen zuge was ouch da ze mol  
 20 der vieren einer ist verhort vnd hatt geseit wie dz sy In  
 hanns langen stuben by ein ander weiend vnd wie hanns lang  
 uff hûb vnd sprech lieben frunde es gat etliche red vnd  
 sachen Im dorff affter wegen vnd ist das von hanns mullers  
 wegen ist mir geklagt worden er hab ein mesz das ze  
 25 grosz sy das nit me den[n] sechsy in ein vierteil gangend so  
 sust andrer messen sibne in ein vierteil gangend ist uch utz  
 darumb wissen wand es mir von heintz leimer vnd klein



- Hanns schnider von oltingen vnd von steinbruchel geseit daruff Im der vordrig zuge rütsch huglin antwurt er hette wol von wiben rede Im dorff affter wegen gon wie er ein nuw mesz gemacht hette ob aber dz ze grosz oder ze*
- 5 *klein were wiste er nit vnd uff das befalch vnd gebot hanns lang disen geswornen die sachen ze verhelen vnd niemand nüt zesagend bis er es an sinen herren brechte vnd darnach kam der her[r] bald gieng hanns lang mit disen zugen vnd mit dem bannwart zû Im*
- 10 *vnd leit Im die sachen für also schikt der her[r] den banwart In die mulin nach dem ymlin vnd besachend vnd mossend das da was es als grosz dz nit me den[n] sechs in ein vierteil giengend vnd also empfalch der her[r] hannsen langen dz er zwen zû Im neme vnd dz mesz gen Rinfelden trügen*
- 15 *vnd die geswornen liesse besechen vnd ze erfarend ob sy semlich ymlin gevecht durch sich selb hettind oder von einem alten oder ob sy es durch hanns mullers geheisz also gemacht haben solten umb dz niemand zû gerett wurde dz nit billichen were*
- 20 *Item Clewin nollinger hanns langen zuge ist verhört vnd hatt geseit das er da ze mal Banwart was vnd sy by ein ander in hanns langen stuben by ein ander warend kam hanns steinbruchel ouch für dz husz gon vnd rufft disem Zugen vnd frogt In was sy da machtend antwurt diser*
- 25 *Zug wir f hand etwas ze schaffen von einungen wegen sprach steinbruchel nemend ir nutz von hanns mullers wegen für als ich dem vogt fur geleit hab von sins ymlins*

Uegen ~~der~~ ditz zuge mein dach ich wil in daran maney  
and ale er vorder in die stuben kam da was hams lang  
in mulich rede sprach ditz zuge vuerlich erst erst end da  
uffen gewepen und hat mir mulicher sachen gedacht ver  
hams lang vore vollenid von den sachen die ich mein ich  
welle so an min herren bringen und bleib die sachen an  
and da der herren kam giong hams lang zu im und nam  
ditz zugen and die vore darzu und leit die sache in ein  
herren fur also vunderend so groet und stichtend ditz  
zugen nach dem ymlin and als er dz ymlin and die stoncy  
er vorderete sprach die ston da lit em ymlin by der mulin  
machtu nomen vort ditz zuge vore ist dz alt hand in ein  
andere antvort die ston ich herren leme and da was ein  
altes das was uff dz ymlin gebletzt and ist zu brachey  
and ich hab die ston vorebrent and also nam ditz  
zug dz ymlin als im besolgen was and bracht es in ein  
herren and der sticht nach der mulin van zunglan  
ymlin and vort end by dem andrey gemessy and  
was hams mulin ymlin als graf dz me me den ston  
in ein ston geugend and des mulin van zunglan  
stun and nach vil vortey so da groet and groeten vort  
da empfalt den herren dem wort dz ymlin and zwen zu  
im ze nomen end das gen empfalten ze tragend ze be  
stehend and by im den herren vorebrent vort dar  
ze habend vort das den van empfalten nach hams  
mulin nach mem and zu groet vort dz men eide  
oder ere beuorte and dach bestiche das bulichy vore  
me sit ditz zuge als sy in mulichen vort vort kam  
herren vort van ston zu in ein mulich vort and  
was sachen ze ston end ist van hams mulin vort vort  
vort and vort in ditz sachen die es kumbt villicht vort  
die vort vort was er uff im hat im mulin hat villicht  
die vort dz im vort so graf ston and villicht vort  
die ston das im herren vort dz ston vort vort vort  
dz geselher vort hams vort and bleib die ston als an ston

Wegen Rett diser zûge nein doch ich wil In daran manen  
 vnd als er wider In die stuben kam da was hanns lang  
 In semlich[en] rede sprach diser zuge werlich es ist erst einer da  
 ussen gewesen vnd hatt mir semlicher sachen gedacht ret  
 5 hanns lang wie wellend wir den sachen tûn Ich mein ich  
 welle sy an min herren bringen vnd bleib die sach an ston  
 vnd da der her[r] kam gieng hanns lang zû Im vnd nam  
 disen zugen vnd die vier darzû vnd leit die sache sinem  
 herren fur also wurdend sy ze/rott vnd schiktend disen  
 10 Zugen nach dem ymlin vnd als er dz ymlin an die frowen  
 er vordrete sprach die frow da lit ein ymlin by der mulin  
 macht u nemen rett diser zuge wo ist dz alt hand ir kein  
 anders antwurt die frowe ich han keins me da was ein  
 altes das was uff dz hindrrst gebletzt vnd ist zer brochen  
 15 vnd ich hab die stucke verbrent vnd also nam diser  
 Zug dz ymlin als Im befolhen<sup>115</sup> was vnd bracht es sinem  
 herren vnd der schikt nach des mullers von zunzkon<sup>116</sup>  
 ymlin vnd wart eins by dem andren gemessen vnd  
 was hanns mullers ymlin als grosz dz nit me den[n] sechs  
 20 in ein fierteil giengend vnd des mullers von zuntzkon  
 sibne vnd nach vil Worten so da gerett vnd geretten wart  
 da Empfalch der her dem vogt dz ymlin vnd zwen zû  
 Im ze nemend vnd das gen Rinfelden ze tragend ze be  
 sechend vnd by sunder her[r] wernh[er] truchsesz ratte darin  
 25 Ze habend umb das denen von Rinfelden noch hanns  
 muller noch niemand zû gerett wurde dz Inen eide  
 oder ere berûrte vnd doch beschehe das billichen were  
 me seit diser zuge als sy in semlichen Worten wrend kam  
 her ûlrich von sissach<sup>117</sup> zû Inen gen vnd sprach ich merk wol In  
 30 was sachen ir sigend es ist von hanns mullers ymlin wegen tûnd so  
 wol vnd beitend<sup>118</sup> in disen sachen bis er kumbt villicht so git ~~and~~ ^er^  
 uch vnder wisung was es uff Im hatt sin mulin hatt villicht  
 die fryheit<sup>119</sup> dz sin mesz so grosz sol sin vnd wil mich beduncken das  
 best sin das ir sin beitent umb dz semlich[en] kost v[er]miten<sup>120</sup> werde vnd  
 35 dz gefiel herr gotz heinrich wol vnd bleib die sach also an ston

A  
hanns  
langen

Item hanns hodelin hanns langen zuge ist verhart und hatt  
gestit das uns malz hometz leunen zu haa leine zu Syssach  
von hanns pberger tur rind sprache zu im hanns lang  
weder woltu mir dz barn geben oder mit siner wut hanns  
lang ja ich gib dir aber ich muess minem herren hangelt  
haben / recht hometz leymer ich wil dir wol einen gulden den  
Zwoen geben mit one han ich / sprach hanns lang das helfft  
mit es muess bar gelt sin / recht hometz leymer lieber til so  
wal rind gang mit mir gen zung ten villicht so licht mir  
der muller so wil dan als mir gebrest so maler ich es auch  
eine wege by im rind du nimbt auch einen bescheidenen lan  
in der muller nimbt ze grassen lon dar recht hanns lang  
nimbt er den grasser lon den ander anwunt hometz leymer  
so knamcy er hett ein ymbin ist als grass dz me me den strass  
in ein fiartal zungend put so gar zezunggen und ander sin  
sibne in ein vierthal

Item woclin muller von zungten hanns langen zug ist ver  
hart und hatt gestit das her Götzhomrich nach im sthite  
und im empfolhe dz ymbin sine lone mit im ze bringty und  
Zwoen der geswaren mit im zenehend also nam er mit  
im liebhart bruggen und ~~graba~~ und also so dan komend  
da sprach her garz homrich was hastu am ymbin gib es her  
wir muessend hanns mullere ymbin da by messen und ver  
plichy da recht dyer zuge lieber her des er lassend mich da  
bit ich uch ambe rind verplichend hanns mullere ymbin by ander  
messen dind by dem minen dach nach wil waarten muess  
er sin ymbin dar lichey und also messend so es mit hme und  
stutend dz in hanns mullere ymbin da macht es die zugen  
ymbin mit gefulley und da stutend so es in ein fiartal da

51

*Item hanns hödelin hanns langen zuge ist verhort vnd hatt  
geseit das eins mols heintz leimer zû Im ^hanns langen^ keme zû Syssach  
vor hanns scherers tur vnd spreche zû Im hanns lang  
weder wiltu mir dz korn geben oder nit // antwurt hanns  
5 lang Jo ich gib dirs / aber ich muß minem herren bar gelt<sup>121</sup>  
haben / rett heintz leymer ich wil dir wol einen guldin oder  
Zwen geben nit me han ich / sprach hanns lang das hilffet  
mit es muß bar gelt sin / rett heintz leymer lieber tû so  
wol vnd gang mit mir gen Zuntzken villicht so licht mir  
10 der muller so vil dar als mir gebrist so malen ich es ouch  
eins wegs by Im vnd der nimbt ouch einen bescheidnen lon  
uwer muller nimbt ze grossen lon da rett hanns lang  
nimbt er den grösser lön den[n] ander anwurt heintz leymer  
Jo bnamen er hett ein ymlin ist als grosz dz nit me den[n] sechs  
15 in ein fierteil gangend sust so gat ze zuntzgen vnd andrrswo  
sibne in ein vierteil*

*Item werlin muller von zuntzkon hanns langen zug ist ver  
hort vnd hatt geseit das her[r] Götz heinrich nach Im schikte  
vnd Im empfelhe dz ymlin sins lons mit Im ze bringen vnd  
20 Zwen der geswornen mit Im ze nemend also nam er mit  
Im lienhart brugger ~~vnd~~ greber vnd also sy dar komend  
da sprach her gotz heinrich wo hastu din ymlin gib es har  
wir müssend hanns mullers ymlin da by messen vnd ver  
suchen da rett diser zuge lieber her[r] des er lossend mich da  
25 bitt ich uch vmb vnd versüchend hanns mullers ymlin by andren  
messen wen[n] by dem minen doch nach vil Worten muß  
er sin ymlin dar lichen vnd also mossend sy es mit hirt<sup>122</sup> vnd  
schuttend dz in hanns mullers ymlin da mocht es dis zugen  
ymlin nit gefullen vnd da schutend sy es in ein fierteil da*

gungend die zugen selne indz fiarteil ond hams nullen  
mit me den sechss ond also rett herzog hennrich und alle  
mit ein ander ond ratz lageten ab die van den solden nime  
mess gemacht hetend ond schilten nach emen messe  
den solden gerecht was ond massend ee da by ond finden es  
gleich als vor

Item Lienhart Brugg hams langen zuge ist verhart  
ond hat geseit zu gleicher weise wie der vorgedacht  
zug hams overlin nullen geseit hat

~~Item Graber van Guntzlin hams langen zuge ist verhart  
ond hat geseit zu gleicher weise wie overlin nullen  
den vorgedacht zuge geseit hat~~

Item Fridlin Nollinger hams langen zuge ist verhart ond  
hat geseit das er mal gesehen hab das omibus messer  
ond dz mit me den sechss in em fiarteil gungend ond  
zereu ze zuntzen selne

Item hams graff hat ist hams langen zuge ist verhart  
ond hat geseit das er ond ander van der gemeente  
in hams stehere stuben possend ond da kann herzog  
hennrich ond griste by ind sprecht lieben frunde wie  
kind von dem sachen van hams nullen ymans wege

Item elwin sollen hams langen zug ist dz er sin hams stehere by  
Item ond stet vil lute da da fragt er wann herzog hennrich was by da medien  
da sprach dize by hand hinnen proget dat sin ym by gemeyn  
ond dz messend by da also gung dize zuge onger ond fragt  
im furbae mit me nach

A  
hams nullen

giengend dis zugen sibne in dz fierteil vnd hanns mullers  
 nit me den[n] sechsyt vnd also rett her[r] gotz heinrich vnd sy alle  
 mit ein ander vnd rotschlageten ob die von Rinfelden nûwe  
 mesz gemacht hettind vnd schikten nach einem mesz so ze  
 5 Rinfelden gevecht was vnd mossend es da by vnd funden es  
 glich als vor

Item lienhart Brugg[er] hanns langen zuge ist verhört  
 vnd hatt geseit zû glicher wise wie der vorgedacht  
 Zug ~~hann~~ werlin muller geseit hatt

10 ~~Item greber von zuntzkon hanns langen zûge ist verhort  
 vnd hatt geseit zû glicher wise wie werlin muller  
 der vorgedaecht zuge geseit hatt~~

Item fridlin nollinger hanns langen zûge ist verhört vnd  
 hatt geseit das er wol gesechen hab das ymlin messen  
 15 vnd dz nit me den[n] sechsyt in ein fierteil giengend vnd  
 deren ze zuntzkon sybne

Item hanns graff ~~hatt~~ ist hanns langen zuge ist verhort  
 vnd hatt geseit das er vnd ander von der gemeinde  
 In hanns scherers stuben sessend vnd da kam her[r] götz  
 20 heinrich vnd grûste sy vnd sprech lieben frunde wie  
 tûnd wir disen sachen von hanns mullers ymlins wegen

Item clewin stellin hanns langen zug sit<sup>123</sup> dz er fur hans scherers husz  
 kem vnd sech vil lutes da / da fragt er wernher zschudin was sy da mochten  
 da sprach diser sy hand minem swoger ^hanns muller^ die sin ymlin genemen  
 25 vnd dz messend si da also gieng diser zuge enwag vnd fragt  
 Im furbas nit me natum<sup>124</sup>

Item d'innere g'meinde hant langten g'wilt verhort und  
 hat g'pilt das er wail und hab gehort sagen und das h'mme  
 mulder in g'mein genommen wail so recht er auch wail das  
 h'mme langt und etlich and gestanden wairend und wail  
 d'her g'wilt und in etlich sin h'mme und als er zuret d'wilt  
 verhalten in dem d'her g'wilt und den and' d'her  
 d'rich wairend und wail h'mme mulder g'mein wairend  
 und das ge empfinden gerecht over sinde

Item d'innere g'mein hant langten g'wilt verhort und  
 hat g'pilt das er in alle g'wilt zu h'mme hant g'wilt  
 h'mme und recht und luten d'wilt da lute er wail so d'wilt  
 d'wilt er in hant d'wilt und das wail und d'wilt  
 und er ergrat d'wilt hant er wail das wail in hant wail  
 in ge and'wilt und das wail in dem d'wilt

Item wail in g'mein hant langten g'wilt verhort und hat  
 g'pilt das er in d'her d'wilt g'mein und g'mein wail wail  
 er wail d'wilt d'wilt das er wail d'wilt g'mein

hab wail wail er so g'wilt mit me d'wilt in d'wilt  
 hant g'mein und g'mein d'wilt d'wilt wail wail  
 in d'wilt wail d'wilt d'wilt d'wilt wail wail  
 d'wilt wail d'wilt d'wilt d'wilt wail wail  
 g'wilt in d'wilt wail wail wail wail wail

*hab ich vernomen es sy ze grosz dz nit me den[n] sechsy in ein  
fierteil gangend vnd gangend aber sust andrrswo sibne  
in ein fierteil antwurt diser zug da weisz ich nut vmb  
ob das ist wol hab ich etlich dar von gehört reden es solle  
5 Ze grosz sin aber ich wil mich sin nüt an nemen nach  
mit ze schaffen han*

*Item werlin zshudin hanns langen zug ist verhort vnd hatt  
geseit das er In diser sach gantz vnd gar nutz wisse wen[n]  
es wurde vor Im verholen das er nutz da von sagen könne*

10 *Item Clewin Erny hanns langen zuge ist ver hort vnd  
hatt geseit das er an alle geuerde zû hanns scherers husz  
keme vnd sech vil lûten darin da lûgt er was sy dettend  
da sach er sin fierteil da ston vnd das mans masz vnd besach  
vnd er erschrack doch fragt er was das uff Im hette wart  
15 Im ge antwurt wie das man ymlin dar by messe*

*Item Cûnrad schmid hanns langen zûge ist ver hört vnd  
hatt geseit das er wol vil hab gehört sagen wie das hanns  
muller sin ymlin genomen were so seche er ouch wol das  
hanns lang vnd Etlich me gefangen woren vnd wart  
20 diser zuge vnd ir etlich für sy burg<sup>125</sup> vnd also erlutret Junck[er]  
wilhelm vom runsz<sup>126</sup> disem zugen vnd den andren burgen  
die sach worumb es were von hanns mullers ymlins wegen  
vnd das ze Rinnfelden gerecht were funden*

Item Hanns Cünstli Hanns Langen zuge ist verhöret und hatt  
gesait das er wol gehöret hab von Hanns Muller ymben  
genomem so comt dz es als groß were das nund sechs in ein  
fiertel gungend und aber andres so sine

Item Hanns Scheer Hanns Langen zuge ist verhöret und  
hatt gesait von das er das ymben in seinem huf sach  
messen und von pletzen

Item Martzenblüt Hanns Langen zuge ist verhöret und  
hatt gesait das er wol hab gehöret sagen Hanns Muller  
hab em ymben so als groß dz mit me seid sechs in ein  
fiertel gungend und aber andres so sine

Item Hanns Tulliter Hanns Langen zuge ist verhöret und  
hatt gesait von das hergötz hemrich nach im und  
nach etlichen me van der gemeind schickte und als so  
dar komend in Hanns Scheers stuben dafur rousten so  
mit was er mit inen verchaffen walt doch so sochend  
so wol das er und die ander uffwendig in huf mit ein  
ander reitend van mangan hand sachey weggen also kam  
hergötz hemrich zu inen in die stuben und sprach loben  
frunde dar umb noch nach uch gesthikt hab dz ist von Hanns  
Muller ymben weggen nach dem hand von gesthikt  
und me lassin nemem von am ist sine lamen es soze  
groß das mit me seid sechs in ein fiertel gungend  
und aber anderer messen sine müstat der Statt

*Item hanns Cũntsch hanns langen zug ist verhört vnd hatt geseit das er vil gehört hab wie hanns muller sin ymlin genomen sy umb dz es als grosz were das rund sechs In ein fierteil giengend vnd aber andrrswo sibne*

- 5 *Item hanns Scherer hanns langen zuge ist verhört vnd hatt geseit wie das er das ymlin in sinem husz sach messen vnd ver sũchen*

*Item mertzenblũst hanns langen zũge ist verhort vnd hatt geseit das er wol hab gehört sagen hanns mull[er]*  
 10 *hab ein ymlin sy als grosz dz nit me den[n] sechs in ein fierteil gangend vnd aber andrrswo sibne*

*Item hanns Tũlliker hanns langen zuge ist verhört vnd hatt geseit wie das her[r] götz heinrich nach Im vnd nach etlichen me von der gemeind schikte vnd als sy*  
 15 *dar komend in hanns scherers stuben ~~da~~ soe wusten sy nit was er mit Inen verschaffen wolt doch so sochend sy wol das er vnd die vier usz wendig Im husz mit ein ander rettend von manger hand sachen wegen also kam her[r] götz heinrich zũ Inen In die stuben vnd sprach lieben*  
 20 *frunde dar umb ich nach uch geschikt hab dz ist von hanns mullers ymlins wegen nach dem hand wir geschikt vnd ims lossen nemen wan[n] vns ist fũr komen es sy ze grosz das nit me den[n] sechs in ein fierteil gangend vnd aber andrer messen sibne nũ stat der Statt*



Rinffelden zeichen gar Erberlichen daruff vnd könnend  
 nit wissen wie wir vns harin halten sollend da antwûrte  
 Im dis so in der stuben wored werlich wir wissend nûtz  
 darumb habend ouch nûtz darvon gehört sagen / Rett her  
 5 götz heinrich wider umb nû bedorffend ir nit gedencken  
 das es min sach sy wen[n] ich malen wenig hie harumb  
 so lûgend vnd ratend wie es ein ding sy oder wie man  
 dem tû da antwurten sy Im vnd sunder rûtsch huglin  
 Ich hab wol gesechen vnd gehört wen[n] man semlich  
 10 ding er sûchen vnd fûrnemen wolt es werend brotbeken  
 oder muller mesz das man das einem vogt befalch  
 vnd der nam einen oder zwen zû Im vnd trûgends  
 gen Rinffelden fur die geswornen vnd liessend das  
 besechen wart es den[n] gerecht funden so liesz man es  
 15 gût sin was es aber nit gerecht so gieng man Im  
 aber darnach nach als billich was also rett her[r] gottz  
 heinrich wol an das ist gar gût so wellend wir Im ouch  
 also tûn vnd Empfalch dem vogt das er zwen von den  
 vier geswornen zû Im neme vnd einen von der gemeinde  
 20 vnd das mesz gen Rinffelden trûgend vnd sich eigentlichen  
 an den geswornen darumb er fûrend ob sy das ymlin ge  
 vecht hettind durch sich selb oder von einem alten ymlîn  
 oder Inen das hanns muller durch sich selb Empfolhen  
 hette so grosz ze machend vnd sunder alt her wernher  
 25 truchsesz ratt darin ze habend vmb das niemand an  
 sin ere noch zû gerett wurde das nit billichen were  
 vnd als sy in disen Worten wored vnd diser zû dzû  
 semlichem geordnet wart ^als ein[er]^ von der gemeind mit dem



56

vogte gon Rinfelden ze gond so kumbt her[r] ũlrich von  
Syssach zũ In gond vnd sprach ich merken wol In was  
sachen ir ietz find es ist von hanns müllers ymlins  
wegen / tũnd so wol vnd varend gemach bis hanns  
5 muller har heim kumbt so schikend nach Im villicht so  
kan er sich verantwũrten vnd uch vnder wisung geben  
was es uff Im hatt sin mùlin möcht villicht die fryheit  
haben das es also grosz sölte sin vnd wölte mich beduncken  
das beste sin das ir sin er warteten vmb das semlicher kost  
10 vermiten wurde / vnd das gefiel her[r] götz heinrich wol  
vnd liessend die sachen also an geston / vnd also bald darnach  
schickt den vogt den Banwart nach disem zũgen da  
sprach diser zũge lieber Banwart was sol ich by Im  
oder mit Im tũn ich bin ein einfoltiger<sup>127</sup> man Ich möchte  
15 nie zũ vn eren bringen den[n] zũ eren darzũ so ver ston  
ich wol das die gemeinde vast uff disen sachen murmlet  
vnd ein miszvollens daran hand vnd sich der sachen  
nũt an nemen wellend was solt ich den[n] da tũn  
so mich die gemeinde nũt darumb bittet Ich wil sin  
20 müssig gen was ich aber minem herren In sinem  
dienste ze willen mag werden wil ich gern tũn  
vnd gieng also mit dem banwart zũ dem vogte  
vnd rett dise wort semlie selber mit Im / also müst  
er vnd noch zwen von den vieren mit dem vogte  
25 gen blotzen<sup>128</sup> zũ her[r] götz heinrich da rett diser zug  
semliche wort wie er mit dem banwart gerett hatt  
vnd schied also wider dannen das er nit weisz wie  
die sach furbas me verhandelt wart

Item Hanns wagt Hanns langey zuge ist warhart  
vnd hat gesit zu gleicher weise wie Hanns tulliker  
der vorgedacht zuge gesit hat an allein das er  
mit da by was da der wagt nach Hanns tulliker  
spricht dz er sint im pilt die wort hat er mit die er  
zu dem bannwart vnd zu dem wagt rett

Item Heinz kint Hanns langey zuge sit auch zu  
gleicher weise wie Hanns tulliker gesit hat

Item Elvyn zshudis Hanns langey zuge sit  
auch zu gleicher weise wie Hanns tulliker gesit hat

Item Hanns haffler Hanns langey zuge sit auch  
zu gleicher weise wie Hanns tulliker da vor ge  
sit hat an allein das er die wort mit gehant  
hand die Hanns tulliker mit dem bannwart  
vnd mit dem wagt rett da er nach im spricht

57

*Item hanns vogt hanns langen zuge ist verhort  
vnd hatt geseit zû glicher wise wie hanns tûlliker  
der vorgedacht zuge geseit hatt an allein das er  
nit da by was da der vogt nach hanns tulliker*

5 *schikt dz er r...t<sup>129</sup> Im solt die wort hort er me die er  
Zû dem banwart vnd zû dem vogt rett*

*Item heintzy kung hanns langen zug seit ouch zû  
glicher wise wie hanns tulliker geseit hatt*

*Item Clewin zschudin hanns langen zuge seit  
10 ouch zû glicher wise wie hanns tulliker geseit hatt*

*Item hanns hofflin hanns langen zuge seit ouch  
Zû glicher wise wie hanns tulliker da vor ge  
seit hatt an allein das sy die wort nit gehort  
hand die hanns tulliker mit dem bannwart  
15 vnd mit dem vogt rett da er nach Im schikt*

Hanns  
muller  
Einfach

Item Hanns Schmit sagt zu Veltelingen Richter in  
diesen sachen und ist Hanns muller zuge ist vor  
hoer und hatt gesait das im wol in denc und messen  
so das Hanns muller im Elenin ermpf stuben zu  
Juncther wilhelm vom Ruff und zu im Keme und  
im ratte fragt und im rite er hette ein mess vom alley  
sien warder ic und ic gebrucht das was mit mer  
nitz und walte brechen das er mit mer da mit kon-  
sthafter und hatt im das er im rite wie er sich da  
mit halten solte // da rett Juncker wilhelm Hanns  
muller du hast recht das du mir das prest und  
mich darumb fragest wer solliche gehort minen  
herren als der abren hand gen waren spang zu  
darumb so mir das solb alt mess und Keme gen am felden  
uff einen tag als er im bestred so wol ich auch da  
sin und dir durch die gesprochney verthafften das er  
ein ander mess nach naturfft geben wirt // sprach  
Hanns muller das wil ich tun wendich walt gar  
ungern da mit vhandlen dz mit recht oder mir ze  
wer messen Keme // und kam also uff den selben tag  
gen am felden mit sinem mess da gien Juncker  
wilhelm und duse zuge zu den gesprochney rechtrey  
und bat die und empfalt sich das so im ein mess  
machend und wechten als das billichen und recht  
were // Darnach kam ha' Marquetter vom baldoge  
fir wie das Hanns muller im mess uff der mulin  
genamen were und der sagt und die duse ge-  
sprochney zu sprach mit ambergung und das

*Hannsz mullers kuntsch[afft]*

- Item hanns Schmit vogt zû Gelterkingen Richter In  
disen sachen vnd ist hanns mullers zuge ist ver  
hort vnd hatt geseit das Im wol In denck vnd wissen  
sy das hanns muller In Clewin Ernysz stuben zû*
- 5 *Junckher wilhelm vom Runsz vnd zû Im keme vnd  
In rates fragt vnd Im seite er hette ein mesz von allen  
sinen vordren ie vnd ie gebrucht das were nit mer  
nûtz vnd wolte brechen das er nût mer da mit konde  
schaffen / vnd batt In das er Im riete wie er sich da*
- 10 *mit halten solte // da rett Junckher wilhelm hanns  
muller du hast recht das du mir das seist vnd  
mich darumb frogest wen[n] semlichs gehort minem  
herren als der obren hand gen varensperg zû  
darumb so nim das selb alt mesz vnd kum gen rinfelden*
- 15 *uff einen tag als er Im beschied / so wil ich ouch da  
sin vnd dir durch die geswornen verschaffen das dir  
ein ander mesz nach noturfft geben wirt // sprach  
hanns muller das wil ich tûn wen[n] ich wolte gar  
ungern da mit v[er]handlen dz nit recht oder mir ze*
- 20 *ver wissen keme // vnd kam also uff den selben tag  
gen Rinfelden mit sinem mesz da gieng Junckh[er]  
wilhelm vnd diser zûge zû den geswornen vechtren  
vnd bat die vnd empfalch Inen das sy Im ein mesz  
machtend vnd vechten als das billichen vnd recht*
- 25 *were // Darnach kam her[r] Marquarten von baldegk<sup>130</sup>  
für / wie das hanns muller sin mesz uff der mulin  
genomen were vnd der vogt vnd die vier ge  
swornen zû Syssach mit vmb giengend / vnd das*

messend by andren messen da befolch her marquart  
Juncther wilhelm das er das selb mess neme und  
das gen emfelden schiffe und hannes muller da mit  
hiesse kamen so wolte er schaffen besprechen worden  
ob es gerecht oder ungerecht were und als das besthach  
and die gesprochney das mess besachend und versuchend  
da funden sy es gerecht und geringend zu her marquart  
und seind im by iren eiden das dz mess gerecht were  
da sprach her marquart zu hannes muller so nim du  
mess wider und gang heim antwort hannes muller  
her das tun ich mit man mochte man sprechen  
ich hette es selber genomen und nach irer  
willen verhandlet empfelhend es doney so mir  
genomen habend das sy es an das ende schaffen  
da sy es fundend da sprach her marquart du machst  
willicht recht han und befolch da by dym zugen  
und andren das sy zu dem wort hannes langen und  
zu den vier gesprochney und zu hannes muller  
griffen die ze wachend oder aber von rechtlichen  
trastung fun hundert lib genommen zu recht  
genommen und was sich da mit recht mochte dem  
nach ze comend das auch uff fund darnach besthach  
was das her marquart empfelhen hatt byc by und  
mit ist dier zuge gesin und das verhandelt gehort  
and geschehen

59

messend by andren messen / da befalch her marquart  
Junckher wilhelm das er das selb mesz neme vnd  
das gen Rinfelden schüffe vnd hanns muller da mit  
hiesse komen / so wolte er schaffen besechen werden  
5 ob es gerecht oder vngerecht were / vnd als dis beschach  
vnd die geswornen das mesz besachend vnd versüchtend  
da funden sy es gerecht vnd giengend zû her marquart  
vnd seitend Im by iren eiden das dz mesz gerecht were  
da sprach her[r] marquart zû hanns muller so nim din  
10 mesz wider vnd gang heîm / antwurt hanns muller  
her[r] das tûn ich nit man mochte morn<sup>131</sup> sprechen  
ich hette es selber genomen vnd nach minem  
willen verhandlet // Empfelhend es denen so mirs  
genomen habend / das sy es an das ende schaffen  
15 da by es fundend / da sprach her[r] marquart du macht  
villicht recht han // vnd befalch da by disem zugen  
vnd andren das sy zû dem vogt hanns langen vnd  
Zû den vier geswornen vnd zû hanns muller  
griffen // die ze vachend oder aber von iecklichem  
20 trostung fur hundert -lib- ~~ze nemend~~ zû recht  
Ze nemend vnd was sich da mit recht machte dem  
nach ze komend // das ouch uff stund darnach beschach  
wie das her marquart Empfolhen hatt hie by vnd  
mit ist diser zuge gesin vnd das verhandelt gehort  
25 vnd gesechen

Item hantzy schaler sagt zu magten hannes mullers  
zuge ist wahrheit und hatt gesit zu gleicher weyt  
wie der richter da war gesit hatt // den das er mit  
zu sprach in einem ernie stuben war da hannes  
muller mit Junckh wilhelm van der ymline  
wegen rett

Item hantzen schäbels hannes mullers zuge ist  
wahrheit und hatt gesit auch zu gleicher weyt  
wie der richter da war gesit hatt // den das er  
auch mit zu sprach in einem ernie stuben war  
da hannes muller mit Junckh wilhelm van  
der ymline wegen rett

Item wachen schmid hannes mullers zuge ist  
hört und hatt gesit das hannes muller eine  
mals zu im kome und im hatt dz er mit im  
zu hannes langgen ginge // und als er mit im  
dar kam in einem ernie stuben // hiß hannes  
muller uff und sprach zu hannes langgen //  
welcher maß er im im ymlin genomen hette //  
antwort im hannes lang er hette es mit geton //  
im her die vier und die gemende hettend es  
geton // daruff im ditz zuz antwort hannes lang

*Item heintzy scholer vogt zû magton<sup>132</sup> hanns mullers  
zûge ist verhört vnd hatt geseit zû glicher wist  
wie der richter da vor geseit hatt // den[n] das er nit  
Zû Syssach in clewin Ernis stuben was da hanns*

5 *muller mit Junckh[er] wilhelm von des ymlins  
wegen rett*

*Item hennslin schöiblin hanns mullers zuge ist  
verhört vnd hatt geseit auch zû glicher wise  
wie der richter da vor geseit hett / den[n] das er*

10 *ouch nit ze sissach in clewin Ernis stuben were  
da hanns muller mit Junckh[er] wilhelm von  
des ymlins wegen Rett*

*Item werlin schmid hanns mullers zuge ist ver  
hört vnd hatt geseit das hanns muller eins*

15 *mols zû Im keme vnd In batt dz er mit Im  
Zû hanns langen gienge / vnd als er mit Im  
dar kam In clewin Ernis stuben / hûb hanns  
muller uff vnd sprach zû hanns langen In  
welicher masz er Im sin ymlin genomen hette //*

20 *antwort Im hanns lang er hette es nit geton/  
sin her[r] die vier vnd die gemeinde hettend es  
geton / daruff Im diser zug antwort hanns lang*

das red mit ich wil mich des wer antwurt zu  
manem teil/ach bin mit da by gesein / und in disen  
worten redt hannes muller ab man in der wolte in im  
wider geben oder mit sprach hannes lang daruff  
wil ich mich bedencken / und man die vier ge  
sprachen zu im und kam wider umb und sprach  
er getunste es mit tun / doch so solte er im für  
wartzig lüt trostung geben mit sinem haren  
ze verkommen und da by glauben dz ymlin mit  
ze ver endend so wolte er sine wider geben

Item hannes bruder hannes muller zuge yt  
ver hat und hat gestit das er auch in einem  
sinen stuben war da hannes muller zu hannes lingen  
sprache in welcher maß er im im ymlin genommen  
hete da antwurt im hannes lang ich habes mit  
geten mit har und die vier und die gemene hand  
es geten und das ver antwurt auch duse zuge er  
war mit da by gewesen und war im vnschuldig //  
und uff sinen reit aber hannes muller ab er sine  
wider geben wolte oder mit sprach hannes lang  
daruff wil ich mich bedencken und nam die vier  
gesprachen zu im und kam wider umb und sprach  
er getunste sine mit geben doch solte er im trostung  
für wartzig lüt geben mit sinem haren verkommen  
und da by glauben das ymlin mit ze ver endend so  
wolte er sine wider geben

61

*das red nit ich wil mich des ver antwurten zû  
minem teil / ich bin nit da by gesin // vnd In disen  
worten rett hanns muller ob man Ims wolte sin Imlin  
wider geben oder nit sprach hanns lang daruff*

5 *wil ich mich bedencken vnd mam die vier ge  
swornen zû Im vnd kam wider umb vnd sprach  
er getörste<sup>133</sup> es nit tûn / doch so solte er Im fur  
viertzig -lib- trostung geben mit sinem herren  
Ze verkomend vnd da by globen dz ymlin nit  
10 ze ver endrend so wolte er Ims wider geben*

*Item hanns brotlin hanns læ mullers zuge ist  
ver hort vnd hatt geseit das er ouch in Clewin  
Ernis stuben were da hanns muller zû hanns langen  
spreche in welicher masz er Im sin ymlin genomen*

15 *hette da antwurt Im hanns lang ich hab es nit  
geton min her[r] vnd die vier vnd die gemeind hand  
es geton vnd das ver antwurt ouch diser zuge er  
were nit da by gewesen vnd were sin vnschuldig //  
vnd uff semlichs rett aber hanns muller ob er Ims  
20 wider geben wolte oder nit sprach hanns lang  
daruff wil ich mich bedencken vnd nam die vier  
geswornen zû Im vnd kam wider umb vnd sprach  
er getorste Ims nit geben doch solte er Im trostung  
fur viertzig -lib- geben mit sinem herren zeverkomen  
25 vnd da by globen das ymlin nit ze ver endrend so  
wolte er Ims wider geben*



Item Clewin schûw hanns langen<sup>134</sup> zuge ist ver hört  
 vnd hatt geseit das er ouch mit hanns muller in  
 Clewin Ernis stuben ~~st~~ gieng vnd hûb uff vnd sprach  
 Zû hanns langen in welicher masz er Im das Imlin  
 5 genomen hette antwurt Im hanns lang ich hab  
 es nit geton min her[r] die vier geswornen hand es  
 geton rett ouch diser zug da by bin ich nit gesin  
 vnd weisz nit darumb // da rett aber hanns muller  
 ob er Im das ymlin wider wölte geben oder nit  
 10 sprach hanns lang des wil ich mich bedencken  
 vnd nam die vier vnd kam wider umb vnd sprach  
 er getörste Ims nit wider geben doch solte er Im  
 trostung fur viertzig -lib- geben mit sinem herren  
 Ze ver komend vnd da by globen dz ymlin nit ze  
 15 ver endrend so wolte er Ims wider geben / me seit  
 diser zuge dz er vnd hanns muller eins mols gen  
 Basel zû Bremenstein dem zunfftmeister<sup>135</sup> kemend  
 da batt ^er^ In das er Im raten vnd by stentlichen wolte  
 sin In sinen sachen / sprach der zunfftmeister ist das  
 20 ymlin nach nit gen rinfelden komen sprach diser zuge  
 ich gloub nit das es da sy // da rett der zunfftmeister  
 lieber tû so wol vnd sag dem vogt das er es dar schaff //  
 das ouch diser zuge dett // was aber hanns lang da  
 mit meint er gieng oder rat gen blotzen / darnach kam  
 25 der vogt von varensperg vnd nam das ymlin vnd  
 schüff es gen b Rinfelden

Item heini nollinger hannes nullars zuge ist verhart  
und ist der wachen end und hatt gesit wie das er auch  
in elwin erms stuben war by hannes langgen und  
lein hannes nullar und wardete sin ymlin da rett  
der wagt er hette sin mit gewalt und mit menge  
ley warty das er cuttel zornig uber ein anda wurden  
und hannes nullar sin ymlin mit wart ob aber hannes  
lang die anertzig lit an hannes nullar wardete ist  
dym zugen mit gudenck

Item wacklin harsperg hannes nullars zuge ist der  
wachen einer und ist verhart und hatt gesit wie  
das hannes nullar nachtes zu im in sin huse kome  
und sit im wie er gewanncet war worden von der  
ymlin wegen das er darumb in sorgen muste sin  
und hatt dym zugen das er zu hannes langgen zue  
und im von dem gelt und trostung gewinne da  
geng dym zuge zu ruden hodelin der auch der  
geswamnen einer was und nam den mit im und  
gengend zu hannes langgen dem wogte und retten fruliche  
mit dem wagt wie hannes nullar sy gebetten hette  
mit im zeredend und gelt und trostung dan im  
begit und an ruffte antwort quen hannes lang  
ich hab kein gelt noch trostung ze gebend aber mine  
haren hals und sin werten und auch min hals  
mit ich so seher sagen dym zuge was auch im elwin  
erms stuben da hannes nullar sin ymlin wider an  
hannes langgen wardet und wie er sprach in anelichen  
mass er im genemich hette antwort im hannes lang

- Item heini nollinger hanns ~~tmullers~~<sup>136</sup> zug ist verhort  
 vnd ist der vieren ein[er] vnd hatt geseit wie das er ouch  
 in clewin Erniss stuben were by hanns langen vnd  
 kem hanns muller vnd vordrete sin ymlin da rett  
 5 der vogt er hette sin nit gewalt vnd mit menger  
 ley worten das ir enteil zornig uber ein ander wurden  
 vnd hanns muller sin ymlin nit wort ob aber hanns  
 lang die viertzig -lib- an hanns muller vordrete ist  
 disem zugen nit In denck
- 10 Item werlin hersperg hanns mullers zuge ist der  
 vieren einer vnd ist verhort vnd hatt geseit wie  
 das hanns muller nachtes zu Im In sin husz keme  
 vnd seit Im wie er gewarnet were worden von des  
 ymlins wegen das er darumb in sorgen müste sin  
 15 vnd batt disem zugen das er zu hanns langen gieng  
 vnd Im von dem geleit<sup>137</sup> vnd trostung gewunne da  
 gieng diser zuge zu rüdin hödelin der ouch der  
 geswarnen einer was vnd nam den mit Im vnd  
 giengend zu hanns langen dem vogte vnd retten semlichs  
 20 mit dem vogt wie hanns muller sy gebetten hette  
 mit Im ze redend vnd gleit vnd trostung von Im  
 begert vnd an rufft // antwort Inen hanns lang  
 ich hab kein geleit noch trostung ze gebend aber mins  
 herren halb vnd sin[er] vetren vnd ouch min halb  
 25 wil ich In sicher sagen / diser zuge was ouch In clewin  
 Erniss stuben da hanns muller sin ymlin wider an  
 hanns langen vordret vnd wie er sprach In welcher  
 masz er Ims genemen hette antwort Im hanns lang

Er hette es mit geton sin her und die vor und die ge  
meinde hettend es geton da wurden etlich zammig  
und wider retten das und also sprach aber hannes  
muller ab er ime wolte wider geben oder mit da  
antwort hannes lang ich wil mich sin bedentley  
und nam die vor zu im und kam vnder umb wid  
sprach er getonste ime mit wider geben dach so solt  
er im trostung fur wartzung gebey mit sinem  
hantze ze verkomens und da by glosen dymlein me  
ge war endend so wolte er ime wider geben

Item rüdm hädelen hannes muller zuge ist da vor  
geswamen end ist vor hant und hat gestit vor  
das er mit dem ob gedachten zugen zu hannes langem  
dem oegt giong und im streen ime hannes muller  
trostung und geleitet heget und mo der oegt sprach  
er hante bin glet ze gehend und was hannes lang  
Inen danuff ze antwort gab ab im glet wurde oder  
mit ist dym zugen mit In denck / er seit auch das  
er im cloren eunff stuben vor da hannes muller  
kam and zu hannes langem sprache in ewelichen maß  
er im im ymlin genommen hette da antwort im  
hannes lang er hette es mit geton sin her und die  
vor und die gemeind hettend es geton da wurden  
etlich zammig und wider retten das und In denck  
wartze sprach aber hannes muller ab er ime wider

64

*Er hette es nit geton sin her[r] vnd die vier vnd die ge  
meinde hettend es geton / da wurdend etlich zornig  
vnd wider retten das / vnd also sprach aber hanns  
muller ob er Ims wolte wider geben oder nit da  
5 antwûrt hanns lang ich wil mich sin bedencken  
vnd nam die vier zû Im vnd kam wider vmb vnd  
sprach er getörste Ims nit wider geben doch so solte  
er Im trostung fur viertzig -lib- geben mit sinem  
herren ze verkomend vnd da by globen dz ymlin nit  
10 Ze ver endrend so wölte er Ims wider geben*

*Item rüdin hödelin hanns mullers zûgge ist der vier  
geswornen ein[er] ist verhört vnd hatt geseit wie  
das er mit dem ob gedachten zûgen zû hanns langen  
dem vogt gieng vnd Im seiten wie hanns muller  
15 trostung vnd geleites begert vnd ~~wie der vogt spreek~~  
~~er hette kein gleit ze gebend~~ vnd was hanns lang  
Inen daruff ze antwurt gab ob Im gleit wurde oder  
nit ist disem zugen nit In denck / er seit ouch das  
er In clewin Ernisz stuben were da hanns muller  
20 kam vnd zû hanns langen spreche in welicher mesz  
er Im sin ymlin genomen hette da antwurt Im  
hanns lang er hette es nit geton sin her[r] vnd die  
vier vnd die gemeind hettend es geton da wurdend  
etlich zarnig vnd wider retten das // vnd In denen  
25 worten sprach aber hanns muller ob er Ims wider*

Wolte geben ada mit sprach hannes lang des wirtlich ameg  
bedencken rind nann die wirt geprechen zu im der duse zuge  
ein was rind kam wider rind rind sprach er getoste gms mit  
wider geben doch wolte er im trostung sin col lib 3 geben  
mit sinen herten zu w rind rind rind da la gelabey das  
ymlich mit zu aber andren so wolte er gms omba geben



Also nach mit werten (ted and wider ted mid nach  
hanung der kunstschaffler

Umgehorsam lütte  
Ist gepen  
Ist hanwald  
Ist epting was walt in Eberwald allen  
uff imtrag werpfligstey Omis lute

65

*Wolte geben oder nit / sprach hanns lang des wil ich mich  
bedencken vnd nam die vier geswornen zû Im der diser zûge  
ein[er] was vnd kam widerumb vnd sprach er getörste Ims nît  
wider geben doch wölte er Im trostung fur xl <sup>138</sup> -lib- ...<sup>139</sup> geben  
5 mit sinem herren zû v[er]komend vnd ouch da bi globen das  
ymlin nit zû ver endren so wolte er Ims wider geben*

*Also nach vil worten Red vnd wider Red vnd nach ver  
horung der kuntschafft ic*

*vngheorsam lütte*

*Ic gempen*

*uff zinstag verpfingsten Anno lx...<sup>o</sup> 140*

*Ic honwald*

*Ic Eptinge[n] was werlin bdernia[.] allem*

## 史料註

\* 活字化ならびに註の作成にあたっては、*Lexen, Matthias, Mittelhochdeutsches Handwörterbuch*, 3 Bde., Stuttgart 1992; *Matthias Lexers Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch*, Stuttgart 1986; *Hennig, Beate, Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch*, Tübingen 2001; *Grun, Paul Arnold, Schlüssel zu alten und neuen Abkürzungen (Grundriß der Genealogie, Bd.6)*, Limburg an der Lahn 2002. を参照した。

- 1 *mendag* = *mântac* = Montag 「月曜日」
- 2 聖ヨハン・バプティストの祝祭日。 *uffmendag nach sant Johans bapptisten tag* 「聖ヨハン・バプティストの祝祭日の次の月曜日に」
- 3 *lx* 「60」 *Anno lx* はここでは「1460年」を指すものと思われる。
- 4 *hangender* < *hängen* 「停滞している、片がつかない、先へ進まない」
- 5 *Gelterkinder* (ゲルターキンデン)。アムト・ファルンスブルク内の中心村落。12世紀以降しばしば *Gelterkingen* と記された。
- 6 *menglich* = *mannegelich* = jeder, jedermann
- 7 *Sisgau* (シスガウ)。 *Syszgow* のほか、綴りにはヴァリエーションがある。
- 8 オトナン=ジラル女史によれば、*et cetera* もしくは *atque* の略号の可能性がある。以下、同様の箇所多数あり。
- 9 *Sissach* (シーサハ)。 *Sjssach* のほか、綴りにはヴァリエーションがある。
- 10 *ietz* = *jetzt*
- 11 *Buckten* (ブクテン)。アムト・ホムブルク内の村落。古くは *Butken*, *Butkon* などと記された。
- 12 *Zeglingen* (ツェグリンゲン)。アムト・ファルンスブルクの村落。
- 13 *anuordnung* = *anvorderunge* = *Anspruch* 「要求」
- 14 *Intrag* = *Intrige* 「陰謀」
- 15 *für genomen* < *urnemen* = *sich auszeichnen* 「優遇する」
- 16 *luter vnd clerlichen* = *klar und klarlich*
- 17 *verston* < *verstân* = *aufhören* 「断つ」
- 18 *getruwte* < *vertrauen*
- 19 *einhelklich* = *einhellig*
- 20 *semliches* = *samelich* = *gleich*, *ähnlich*
- 21 *Jo* = *Ja*
- 22 *nũ* = *nun*, *jetzt*
- 23 *sid mals* = *sitmâl*, *sitmâles* = *seit der Zeit*, *seit dem* しかしここでは、*site* = *oft im plural* 「しばしば」
- 24 *utzit* = *iht* = *etwas*
- 25 *eb* = *ob*
- 26 *nût* = *niht* = *nicht*
- 27 *nutzit* = *niht* = *nicht*
- 28 *sust* = *so*
- 29 *iemand* = *jemand*
- 30 *furbasz* = *weiter* 「さらに」
- 31 *geirret* < *irren* = *Unrecht haben* 「まちがっている」
- 32 *bürgen* = *Bürge* 「保証人」
- 33 *lidig* = *ledig* 「免れている」
- 34 *mangerley* = *manigerlei* < *menige* = *vielheit* 「多くの、さまざまな」
- 35 *sumig* = *sûmic* = *säumig* 「遅れた」
- 36 *schin* = *Glanz*, *Licht*, *Anblick*, *Form*, *Bild*, *Beweis*
- 37 *gesumbt* = *aufgehalten* < *aufhalten* 「阻む」
- 38 オトナン=ジラル女史によれば、*ic* = *et cetera* の略号の可能性が高い。
- 39 *semlich er* = *semlicher*
- 40 *rüffen* = *Ruf* 「評判、噂」
- 41 *für brechte* < *fürbringen* = *vorbringen* 「申し立てる」
- 42 *urteil* = *Gericht*, *Meinung* ここでは「判決」ではなく「意見聴取」がふさわしい。
- 43 オトナン=ジラル女史によれば、*ic* = *et cetera* の略号。 *Grun, Schlüssel*, S.196, 298 を参照。以下、同様の箇所多数あり。
- 44 *datum* の略号。
- 45 *pq* = *post* 「~の後」 *Grun, Schlüssel*, S.27 を参照。
- 46 オトナン=ジラル女史によれば、*testum* の略号の可能性があるとのこと。

- 47 lxが挿入され、「1460年」を指すものと思われる。
- 48 *abscheid* = Abschied 「決議」
- 49 *erlengung* < *erlangen*, *erlernern* = *verlängern*, *verzögern* 「延期、延長」
- 50 *usz trag* = *Austrag* 「解決、決着」
- 51 *spennen* = *spannen* < *Spannung* 「緊張」
- 52 *wider teil* = *Gegenteil* 「逆、反対のもの」
- 53 *sumen* = *sûmen* = *hinhalten* 「長引かせる」, *zurückhalten* 「引きとめる」
- 54 *absin* = *überwunden sein*
- 55 *des Ersten abscheids* と 9 行目の *dem nechsten v[er]gangnen lantage*、12-13 行目の *dem ersten lantage*、および 19 行目の *der ersten urteil* は同じものを指すと考えられる。
- 56 *harnach* = *in Zukunft, später*
- 57 Peter von Mörsberg (ペーター・フォン・メルスベルク)。騎士。ゲッツ・ハインリヒ・フォン・エプティンゲンの従兄弟で、エルザス、ズントガウ、ブライスガウ、シュヴァルツヴァルトにおけるオーストリアのラントフォークトであった。
- 58 *zuce* = *Zeuge* 「証人」
- 59 *keinestu* = *keinest* = *niemals* 「決して～ない」
- 60 *libes vnd herren not* 「身体と領主と切迫 (必要)」
- 61 *lantbrüchig* 「ラントを乱す、攪乱する」といった意味。
- 62 *-lib-* 「リブラ」は貨幣の通貨単位。
- 63 *ymlin* 「イムリ」。第 2 回公判では「イムリ」という単語はここではじめて登場した。
- 64 *lon* 「糧、報酬」
- 65 *sinhalb* = *von seiner Seite*
- 66 *argwon* = *Argwohn* 「疑心、邪推」
- 67 読み取れなかった。
- 68 *uwer* = *über* または *=iuwer =euer* 「お前たちの」
- 69 *Io* = *Ja*
- 70 *fierteil, vierteil* = *Viertel* 「フィアテル」は容量を示す単位。
- 71 *geswornen* = *Geschworne* 通常は「陪審員」であろうが、ここでは「誓約衆」とした。
- 72 *benügens* = *Befriedigung*, *Genügen*
- 73 *anderlut* = *andere Leute*
- 74 *trostung* = *Tröstung* 「慰めてくれるもの」 = 「慰謝料」
- 75 *et cetera* の略号か。
- 76 *verfencklich* = *vervanlich*, *vervenlich* = *tauglich* 「古くなりすぎてもはや役に立たない」
- 77 *vechten* = *fechten* 「もろう」
- 78 *verlumbdeten* < *verlumbden* = *verleumden*, *in übeln ruf bringen* 「誹謗中傷する、名誉を毀損する」
- 79 *lantgeschrey* < *geschrei* 「わめき声、評判」。したがって、*verlumbdeten lantgeschrey* を「類を見ないゆゆしきラント騒擾」とした。
- 80 *gewent* = *gewendet*, *gewandt* < *wenden* 「依頼する」
- 81 ルッチ・ヒュグリン、ルディン・ヘディン、ヴェルリン・ヘルスベルク、ハイニ・ノリンガーがここで言及された「四誓約衆」もしくは「四人衆」の名である。
- 82 *banwart* は「耕地番」。
- 83 *Zunzgen* (ツンツゲン)。*Zuntzkon* とも記される。ツンツゲンはアムト・ファルンスブルク内のシーサハの南隣の村落。ツンツゲンのヴェルリン・ミュラーはツンツゲンの粉屋。
- 84 *Rheinfelden* (ラインフェルデン)。*die geswornen von rinfelden* は「ラインフェルデンの誓約衆」。
- 85 「1460年」を指す。
- 86 *wijt* = *weit*
- 87 *sinen gericht* は自身 (ゲッツ・ハインリヒ・フォン・エプティンゲン) の裁判、すなわち領主裁判を指す。*hochen gericht* は上級裁判、すなわちラント裁判を指す。
- 88 *usz* = *aus*
- 89 *ie vnd ie = je und je, immer* 「いつも」
- 90 聖母マリアの祝祭日。*uff suntag vor unser lieben frowen tag* 「聖母マリアの祝祭日の前の日曜日に」
- 91 *natuutatum* の省略記号。
- 92 *tertig* と読めるが、意味は不明。
- 93 *sag* = *sage* = *Aussage* 「証言」
- 94 *geseit* = *sagen*
- 95 *H langen* は *Hans Langen* を指す。
- 96 *mitgesellen* は「職人」ではなく「仲間」を指すと見るべきであろう。
- 97 *von ejnungen wegen* 「アイヌング (=誓約) について」

- 98 *andrrsswo* = anderswo  
 99 *werlich* = wahrlich  
 100 *gat* < *gân* < *gehen*  
 101 *besachend* < *besehen* 「吟味する」  
 102 *mossend* < *messen* 「測る」  
 103 *zeichen* 「基準、指標」  
 104 *brotbecken* 「パン焼き（職人）」  
 105 *dett* < *reden* ?  
 106 *et cetera* の略号か。  
 107 *zwen* = *zwei*  
 108 *Werner von Truchsess* (ヴェルナー・フォン・トゥルーフェセス)。貴族家系トゥルーフェセス家は都市ライプフェルデンの指導層を構成し、おもにシュルトハイス職や都市参事会員を務めた。  
 109 *vn Erlichen* = *unehrlichen*  
 110 *deding* < *redunge* = *rede* 45 ページ 9 行目の *wiben red* に同じと思われる。  
 111 *gand* < *gân* < *gehen*  
 112 *hodlern* = *Hodler* 「行商人」。史料では「行商人」という単語はここではじめて登場した。  
 113 *gesellen* も註 96 に同じく「職人」ではなく「仲間」がふさわしい。  
 114 *gatt* < *gân* < *gehen*  
 115 *befolhen* < *bevelhen* = *versorgen*  
 116 *des mullers von zunzkon* ツンツゲンの粉屋ヴェルリン・ミュラーを指す。  
 117 *ûlrich von sissach* シーサハの助任司祭。  
 118 *beitend* < *biten* = *warten* 「待つ」あるいは *zögern* 「ためらう」  
 119 *die fryheit* 「自由、特権」  
 120 *vferjmiten* = *sich verdingen* 「(bei) ~に雇われている、~のもとで奉公する」  
 121 *bar gelt* = *Bargeld* 「現金」  
 122 *hirt* = *Hirt* 通常は「羊飼い、牧人」だが、ここでは「家畜番」か。  
 123 *sit* これは *ist* のまちがいか。  
 124 *natum* < *nativitatis* か。Grun, *Schlüssel*, S.204 を参照。  
 125 *burg* = *Bürge* 「保証人」。註 32 に同じ。  
 126 *Wilhelm von Runß* (ヴィルヘルム・フォン・ルンス)。有力家系の 1 つと思われるが、詳細は不明。  
 127 *einfoltiger* = *einvaltec*, *einvaltic* = *einfach*  
 128 *blotzen* = *Blotzheim* (ブロッツハイム)。  
 129 *rint* か。意味は不明。  
 130 *Marquart von Baldegg* (マルクヴァルト・フォン・バルトエック)。バルトエック家はハプスブルク家のミニステリアーレン出身の貴族家系。  
 131 *morn* = *marn* = *merren* = *bleiben*, *mehr* か。  
 132 *Magden* (マクデン)。シスガウ・ラントグラーフシャフト管轄区外かつアムト・ファルンスブルク外の北に位置する近郊村落。  
 133 *getörste* < *geturten* = *sich unterstehen*, *getrauen*, *wagen*  
 134 *langen* は *muller* のまちがいと思われる。  
 135 *gen Basel zû Bremenstein dem zunfftmeister* 「バーゼルのツンフトマイスターのブレーメンシュタインのところへ」  
 136 *lmullers lang* と書きかけ、*muller* に訂正したと思われる。  
 137 *geleit* = *Schutz* 「保護」。 *geleit und trostung* は「保護と補償」。  
 138 *xl* は「40」。 *xl-lib* は「40 リブラ」。  
 139 註 75 に同じく、*et cetera* の略号か。  
 140 *lxii<sup>o</sup>* とも読める。その場合、これが「1462 年」を意味するとすれば、公判が開催された 1460 年に合わない。このメモ書き部分全体が 1462 年に追記されたかもしれないが、確証はない。また公判記録全体あるいは少なくとも第 3 回公判部分が 1462 年に原本から書き写され、それがここに提示した史料であったとすれば、随所のまちがいも書き写しの際のミスとして説明することができる。しかしそれも想像の域を出ない。

#### 【謝辞】

史料のマイクロフィルム化、写真の入手にあたっては、当公文書館のスタッフ、とりわけミレイユ・オトナン＝ジラル女史にたいへんお世話になった。また判読に際しても女史の手を煩わせ、多大なご教示をいただいた。あわせて感謝の意を表したい。なお史料の写真の掲載について、女史ならびに当公文書館の許諾を得た。重ねて御礼申し上げたい。